

2019年度事業報告書

公益財団法人 東洋文庫

2019年度 公益財団法人東洋文庫事業報告書

公益財団法人 東 洋 文 庫
理事長 榎 原 稔

2019年4月1日～2020年3月31日までに行われた公益財団法人東洋文庫事業の概要は下記の通りです。

事 業 目 的

公益財団法人東洋文庫は、全国の代表的な研究者よりなる東洋学連絡委員会の企画ならびに審議にもとづき、広く学界の要望に応える全国的な、また国際的な東洋学研究センターとして、資料センター・共同利用研究施設としての機能を果たすべく、必要な各種の事業を行うとともに、東洋学の不特定多数への広い普及をはかり、学術・文化・芸術の振興に寄与する。

事 業 項 目

概 要.....	2
I アジア基礎資料研究.....	6
II 資料収集・整理.....	23
III 資料研究成果発信.....	25
IV 普及活動	26
V 学術情報提供.....	35

概 要

I 研究事業の全体構想

東洋文庫は、1924年、欧文貴重書 1,100 点余を含む欧文図書資料からなるモリソン (G. E. Morrison) コレクション、ならびに和漢の貴重古典籍からなる岩崎文庫を中核として、岩崎久彌氏によって、アジアの貴重図書資料に関する民間の研究図書館として創設された。その後 90 年以上にわたり、一貫してこれらの貴重図書資料を中核とする 100 万冊に及ぶアジア諸地域の現地語資料を継続的・系統的に収集し、それらのすべてを散逸させることなく保存・管理し、同時に広く世界の研究者ならびに市民に公開することを目的とした事業を進めてきた。

研究事業の長期的な目的は、これらのアジア研究に関する貴重図書資料を保存・管理・公開し、なおかつアジア現地語資料を収集・整理して、内外の研究者の利用に供するとともに、これらの資料に基づく広範なアジア研究を推進して、世界のアジア研究の進展に大きく貢献することに置かれている。このような研究事業を 280 名に及ぶ研究員を擁して推進する類似の民間の研究図書館は国内には存在せず、世界的に見ても稀有な存在であり、アジア研究の長い伝統を有する東洋文庫が世界的に高く評価される理由であると同時に、長年にわたって蓄積されてきた特色ある研究を継続的に推進することは、世界のアジア研究者が切望するところでもある。

II 特定奨励費による研究事業の目的

東洋文庫は、「I 研究事業の全体構想」に述べた事業目的をさらに効果的に実現するために、これらの基本的な課題を推進する中で、2012 年度以来、以下の点に一層重点を置いて、特定奨励費による研究事業を推進してきた。

- (1) 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の教訓を踏まえ、貴重資料に関する書誌的資料研究をより一層強化し、併せて貴重資料の修復・保管・複製化・電子化という連続した資料保存とその公開をより系統的かつ持続的に推進する。
- (2) 大きく変動するアジア＝世界情勢に対応する研究として、東洋文庫のすべての研究班の連携によって構成される「総合アジア圏域研究班」を設置し、主題研究、地域研究、資料研究を連結した「総合アジア圏域研究」を全アジア的視野から推進する研究体制を構築する。
- (3) 「総合アジア圏域研究」に伴う資料交流・人的交流・国際交流を一層推進し、電子化などによって研究成果を広く発信し、国際的な発信力を強化する。
- (4) 東洋文庫における資料研究・総合アジア圏域研究・国際交流・国際発信などの基本事業に不可欠な若手人材を育成する。

特に 2016 年度より、(1) アジア資料研究データベースの構築（試行期）、(2) 資料調査・研究の推進と、それによる現地研究機関との共同研究の推進、(3) 国際シンポジウム・ワークショップの開催による国際発信と国際交流の推進、(4) 研究成果の刊行・発信の強化、(5) 若手研究者の育成、という 5 点の重点事業目標を設定して、研究班によるアジア現地研究・資料調査と収集を基礎に、研究データの保存・管理・公開を一体化した総合的アジア研究データベースの構築を推進すると共に、東洋文庫の刊行物ならびに各種講演会・講習会ならびにミュージアムによる経常的な公開展示などの取り組みを通して、ひろく内外にその研究成果を発信している。

資料調査・研究の推進と、それによる現地研究機関との共同研究の推進についていえば、系統的かつ継続的にアジアの各地域に関する現地の原語資料を収集し、それを現地の研究者・研究機関と共同して整理・編集して目録を作成し、世界の研究者の用に供している。特徴的な活動としては、中央アジア研究において、ロシア・サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー東洋写本研究所との協力関係・信頼関係のもと、中央アジア出土のウイグル文書の編集を共同で行い、20 年間にわたり目録の編集を継続して行い、現在はこれをデータベース化してデータの充実に取り組みつつ内部公開し、外部公開のための協議を行っている。同様に、協力協定

機関であるアメリカのハーバード・エンチン研究所や、台湾の中央研究院などとの間で長年にわたって調査協力・国際共同研究・資料交換・人材交流等を行っている。このような研究機関相互の信頼関係に基づいて長期間にわたって継続的に行われる研究活動は、個人や研究グループが短期的に実現できるものではなく、東洋文庫が研究図書館として実施するのにふさわしい事業であるといえる。

アジア資料研究データベースの構築についていえば、(1) 資料、(2) 研究 (分類・目録・索引など)、(3) 成果、の三者を一体化した総合的アジア研究データベースの作成と、それによる研究データの保存管理、成果の公開発信を目的とするものである。具体的には、アジア各地域の原資料のデジタル化と分析・解読を基礎とし、これに関連する研究情報をメタデータとして付加し、多分野にわたる研究を横断的かつ通時的に検索することが可能な汎用性の高い総合的研究データベース・システムを構築するべく取り組んでいる。これはアジアに関する基礎資料研究の長い伝統と蓄積を有する東洋文庫だからこそ可能であると同時に、学術団体としての東洋文庫の特徴を十分に体现しうるものとする。

III 2018～2020年度の重点事業目標

東洋文庫の基本的な事業を継続的に推進するなかで、2018～2020年度において重点的に取り組む主要な事業項目を以下に掲げる。

- (1) アジア基礎資料研究の構築と、それによる現地研究機関との共同研究の新展開
- (2) 総合的アジア研究データベースの推進 (開発期)
- (3) 国際シンポジウム・ワークショップの開催による国際発信と国際交流の推進
- (4) 研究成果の刊行・発信の強化
- (5) 若手研究者の育成

アジア基礎資料研究については、従来の研究班主体の調査研究体制を改め、研究部執行部の主導のもとアジアのすべての地域に跨がる資料の収集、保存、公開、研究が一体化した、東洋文庫の伝統と蓄積を継承・発展させる基礎資料研究の構築に重点を置く。特に、すべての研究班が参画する総合アジア圏域研究班において、アジア各地の資料に用いられた紙に対して新たに導入する精密顕微鏡による精密調査を行い、地域別・時代別の紙質分布データベースを構築することで、資料の研究・保存・公開の各方面に有効活用できる基礎データを蓄積し、東洋文庫の伝統であるアジア資料学をより深化・展開させることを目指す。また、総合的アジア研究データベースの構築は、2018～2020年度においてもっとも重点を置いている項目の一つであり、2015～2017年度の「アジア資料研究データベースの構築」を試行期、今期を開発期に位置づけ、データ収集、システム開発において完成の域に達することを目標としている。

特定奨励費による本研究事業は、基本的には、アジアに関する資料の収集・保存、研究、公開の一体化とそのための効果的な事業運営に特徴がある。具体的には、【資料の収集・保存】研究者による資料 (国内外の専門書・和漢洋の古典籍) の収集、多言語に通じた司書による蔵書資料検索データベースの充実、専門家による和漢洋古典籍の保存修復、【研究】研究者によるアジア基礎資料研究、研究者によって蓄積された研究データ (研究資源・研究成果) の保存・活用、若手理系研究者との共同による総合アジア研究データベースの構築および他機関で作成された資料研究データベースとの連携、すべての研究班による総合アジア圏域研究国際シンポジウムの開催、ハーバード・エンチン研究所、ECAF (European Consortium for Asian Field Study)を始め協定機関との国際連携の強化、【公開】収集した書籍の蔵書・資料検索データベースによる公開、蓄積された研究データの総合的アジア研究データベースによる公開、定期刊行物・オンラインジャーナル・論叢等出版物・機関リポジトリ「ERNEST」 (<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/>) による研究成果の発信、内外の研究者による広く一般に向けた東洋学講座の開催、外国人研究者による特別講演会の開催、東洋文庫の蔵書に通暁した学芸員によるミュージアムの企画展示などに対し、研究員・司書・学芸員が一丸となって取り組むことで、アジア研究の総合的研究水準を高めると同時に、東洋学に携わる後進の育成と一般への普及に貢献することを目指す。

IV 研究事業の効果

研究事業の効果について、2018～2020年度の重点研究事業である紙料調査を中心に述べる。

A. アジア基礎資料研究

東洋文庫が所蔵するアジア関連の図書・資料は洋書 30 万冊、和漢籍 70 万冊に上り、書写・印刷時期は、洋書は 15 世紀、和漢書は 8 世紀を筆頭に、それぞれ現代に及び、書写・印刷地域は、アジアとヨーロッパを中心とした全世界に及んでおり、しかも、そのすべてが原典である。このように広範かつアジアに集中した内外の図書・資料を保管・公開して世界のアジア研究者の用に供し、併せて 280 名に及ぶ研究員がアジア資料研究に従事する研究図書館は世界に類を見ないと言える。これらの蔵書を維持・管理することは東洋文庫に課せられた使命であり、その記述資料を保存・修復するためには、資料の素材である紙質・紙料の分析が不可欠である。この紙料調査を東洋文庫所蔵資料とアジア諸地域の現地資料館との双方において進めることを、3 年間の重点事業として計画している。

紙質調査の効果は、諸方面に期待できる。アジア各地の紙の製法・特徴を明らかにすることで、資料に用いられた紙の製造時期・地域が特定できるようになり、ヨーロッパに輸出されたアジアの紙が、印刷された後にアジアにもたらされるなど、紙という文化資源の国際流通の実態や、紙の流通を背景とした書籍流通による知的文化交流の実態が明らかとなる。例えば、古代から楮、三桮で紙を漉いたアジアに比較して、ヨーロッパではリネンや羊皮紙が用いられ、紙文化の好対照をなしている。東洋文庫所蔵資料は時代的にも空間的にも、世界のアジア関連の書籍資料の全体をカバーしており、紙料の標本と紙質の標準を提示するにふさわしい研究を行う条件が整っている。



精密顕微鏡によるインキュナブラの調査風景

本研究項目は、全研究班が参画する総合アジア圏域研究によるアジア基礎資料研究において、

東洋文庫をはじめ国内外の文献資料の研究・保存修復・公開（閲覧・展示）を目的に紙質調査を行い、時代・地域と関連づけた紙質分析データのマトリックスを作成し、国際標準として国内外に発信することを目指している。

具体的な取り組みとしては、紙譜（紙の素材資料集）、15 世紀のインキュナブラやマニユスクリプトをはじめとする古今東西の古典籍、紙関係の辞書・研究書・図録等を収集し、若手研究者の協力のもと精密顕微鏡によるサンプル調査を実施し、今後の長期的な調査のための土台づくりを進めている。

B. 資料収集・整理

資料収集においても、国内の資料館・図書館と連携し、アジア関連紙料の調査及び整理を進めることで、東洋文庫が作成する紙質分析データのマトリックスの一層の充実を図る。また海外の連携研究機関と協力して紙質調査を行い、東西比較に基づく国際的な紙料の分析・分類を行う。同時に、様々な素材・地域で書写・印刷された資料に対して最適の修復・保存方法を検討・実施する。

具体的な取り組みとしては、2018 年度より、若手研究者を中心に、書誌学者・歴史学者・保存修復技術者・情報学専門家からなる紙質調査チームを結成し、資料の保存・修復の観点に立った調査が可能な体制を構築した。

C. 資料研究成果発信

文理融合型アジア資料学研究シリーズとして、これまで開催してきた講習会・講演会・研究

会をより幅広い時代・地域を対象に開催し、紙質そのものの歴史的特徴のみならず、同時代における文献・書物の格式と、用いられた紙との関係性を明らかにし、紙料に託された社会的役割を吟味する。また、東洋文庫所蔵資料の紙料をもとに作成された紙質分布データベースが、国際的な標準たり得るよう、国内外の資料館と連携して、より一層の充実を図ることも必要不可欠である。

具体的な取り組みとしては、紙質分布データベースによる研究成果発信を、より効果的に推進するため、令和元年度に国内研究機関とのデータベース連携の検討を開始した。

D. 普及活動

紙料調査は単なる素材分析にとどまらず、紙の特徴から版本の刊行された時代・地域・文化的背景を特定することができる。その成果を、講習会や展示会等の普及活動を通して対外的に発信することで、紙料研究の重要性に対する認知度が高まり、紙とアジアの深いつながりに対する社会的な関心を喚起することができる。また、接写用デジタルカメラを使って資料の特徴を簡易的に捉えることもできるので、この方法を対外的に広めることで、アジア諸地域の歴史資料の収集・整理・保存修復に取り組む資料館や、それらを用いて研究する若手研究者の育成に大きく貢献することができる。

具体的な取り組みとしては、2018年度に紙質調査の一般への普及を目的に、国宝『毛詩』、13世紀刊行の高麗大蔵経、18世紀のトルコで刊行された『世界の鏡』等の紙質調査を行い、その結果を東洋文庫ミュージアムで展示した。

最後に、2018年度より開始した「東洋文庫奨励研究員制度」は、若手研究者の育成および雇用促進のための体制を一層充実させるものであり、ひいては、東洋文庫の事業の安定的・継続的な実施を可能にし、かつ東洋学の伝統の継承と発展に大きく寄与するものである。その効果は東洋文庫の内部のみにとどまるものではなく、将来にわたって世界の研究者を裨益するとともに、アジアで育まれてきた人類の叡智を広く市民に伝える公益性の高いものとなる。

I. アジア基礎資料研究

2018年度より、従来のアジア各地域の特徴に沿った研究班・研究グループ主体の調査研究を、研究部執行部の主導のもとに統括され、資料の収集、保存、公開、研究が一体化した、東洋文庫の学問的伝統と蓄積、および国内外の研究ネットワークを継承・発展させる研究体制に改編し、「紙料」調査を中心としてアジア諸地域を横断的に比較総合する「アジア基礎資料研究」に重点を置くこととした。具体的には、研究部執行部が統括する5つの重点事業目標（前掲「概要」の「III 2018～2020年度の重点事業目標」を参照）に基づき、西は北アフリカから東は日本までをカバーする全6研究部門13研究班が、20の基礎資料研究テーマ（p.22「アジア基礎資料研究のための6部門13研究班20テーマ」を参照）を設定して相互に連絡・連携を保ちながら、東洋文庫が収集・所蔵する一次資料の文献学的分析（解題・目録・訳註等の作成）と、それに基づく「紙料」研究を持続的に推進した。これらの研究班・研究グループの諸活動は「総合アジア圏域研究」のもとに連結することで、アジア諸地域の歴史と文化の地域連関と相互影響について、アジア全体を視野に入れた学際的共同研究を推進し、現代アジアの複合的・動的な把握につとめ、その研究成果を、講演会、刊行物、オンラインジャーナル、研究データベース、ミュージアム展示など多様な方法で発信、公開、普及すべく取り組んだ。

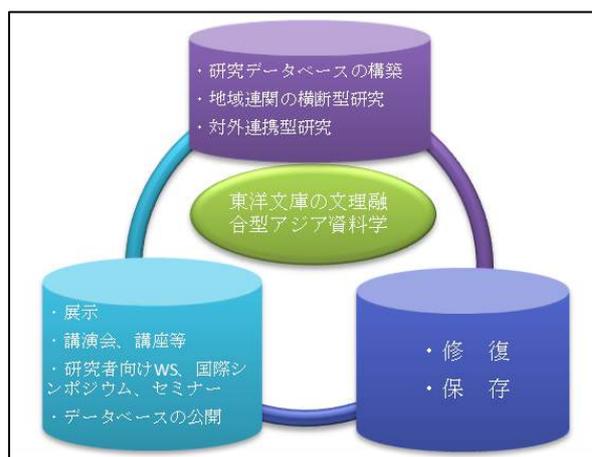
5つの重点事業目標のうち、研究部執行部では、特に研究データベースの構築と若手研究者の育成に力を入れており、他の3項目（アジア基礎資料研究の構築と現地研究機関との共同研究、国際シンポジウム・ワークショップの開催による国際発信と国際交流、研究成果の刊行・発信）の実施においても常にこの2項目と密接に関連するよう留意して取り組んだ。以下、項目別に記述する。

(1) アジア基礎資料研究の構築と、それによる現地研究機関との共同研究の新展開

担当：會谷佳光
相原佳之
小澤一郎
太田啓子

東洋文庫は、国内外を通じて、専門の保存修復室を持つ数少ない研究機関の一つである。資料の素材調査の目的とその意義は、東洋文庫における研究活動・閲覧公開・ミュージアム展示などのすべての局面において、日常的に調査を実施して、その成果を蓄積し保存修復に活用することで、東洋文庫が収集した古今東西の貴重資料を永く後世に伝承することにある。さらに、その成果を研究データベース化して広く発信することで、国内外のアジア関係資料を連携して保存修復・研究・伝承することに貢献することが可能となる。すなわち資料の素材調査と研究データベースによる成果発信は一体不可分であり、東洋文庫が研究図書館として取り組む特色ある研究活動の中心をなす課題であると言える。

そこで、2012年度以来、東洋文庫では、故藤枝晃京都大学名誉教授による敦煌出土文書の古写本研究を基礎に、藤枝氏の学問を継承する石塚晴通研究員と、理系研究者としての視点から精密顕微鏡による敦煌文書等の紙質分析で成果を上げてきた江南和幸研究員の指導のもと、2012年度以来、東洋文庫の蔵書を使った素材調査をアジア各地域の資料に対して実施する研究を行い、データの蓄積を進め、それらの成果を継続的に公開講座「アジア資料学研究シリーズ」などを通して明らかにしてきた。



とりわけ強調すべき点は事業遂行のための実施体制の確立である。今回の事業計画の中核をなす紙質研究は、研究者個人の経験と熟練に依拠し、国・地域・言語で分断された従来の書誌学の限界を克服するべく、すべての研究班・研究グループの参加の下にアジア各地域の紙料情報を系統的に調査収集し、東洋文庫所蔵資料の科学的検討に基づいて相互に比較分析しつつ、古今東西のアジア関連資料の紙質につき東洋文庫から発信する総合的な国際的分析標準を作成し、地域文化の表象である紙をめぐる「知識」の交流史研究に資する点に重点を置いている。
〔研究実施概要〕

資料のデジタル化公開等による電子図書館の機能を混在させた図書館のハイブリッド化が進む中、資料の現物(書籍・地図・絵画・考古遺物・陶器等)からしか読み取れない情報(紙・墨等の素材や生産された地域・時代等)を分析・研究・蓄積・公開していくことは、アジア・ヨーロッパの様々な時代・地域の資料を所蔵する東洋文庫だからこそ実現可能な研究課題である。

総合アジア圏域研究では、「紙質調査チーム」(下記のメンバー表を参照)が中心となって、紙譜(紙の素材資料集)、15世紀のインクナブラやマニスクリプトをはじめとする古今東西の古典籍、紙関係の辞書・研究書・図録等を収集するとともに、新たにリースを開始した最新の精密顕微鏡を使用してサンプル調査を実施し、浙江図書館『中国古籍修復紙譜』(国家図書館出版社、2017年)等の資料から約5,100件の紙質データを蓄積した。インクナブラの調査方法について、紙質に限らず、印刷に使われたインクの調査を試み、160件のデータを収集した。浙江図書館古籍部と交流を行い、紙質データのデータベース化に関する意見交換を行った。蓄積したデータをもとに、研究データベース・システム開発担当の中村覚氏と打ち合わせを行い、画像データは国際規格 IIF (International Image Interoperability Framework) 対応とし、紙質データとその分析結果を書誌情報(出版された年代・地域)とリンクさせることで、年代・地域による紙質分布データベースを構築し、将来的には AI による紙質分析も検討することとした。

役割	担当者(所属・職名)
総括・漢文大蔵経諸版の調査	會谷 佳光(研究部主幹研究員)
研究データベース企画立案	相原 佳之(研究部嘱託研究員)
研究データベース・システム開発	中村 覚(研究協力者、東京大学情報基盤センター学術情報研究部門助教)
調査全般・技術指導	徐 小潔(東洋文庫研究員)
満洲語文献の調査	多々良圭介(研究部奨励研究員)
漢籍・洋書の調査	段 宇(研究協力者)
資料全般	水口 友紀(研究協力者、図書部保存修復臨時職員)
ちりめん本等の調査	田村 彩子(研究協力者、図書部保存修復臨時職員)
欧米・アジアの比較研究	リンダ・グローブ(研究部研究員)
調査研究顧問	江南 和幸(東洋文庫研究員)
調査研究顧問	石塚 晴通(東洋文庫研究員)

水口・田村は、資料保存の観点から、精密顕微鏡による紙質調査をより安全に推進するため、機器を用いた所蔵資料調査のガイドラインの作成に取り組んだ。また、モリソン文庫等の所蔵資料に対して、紙質の劣化やカビの発生等の兆候が見られないかを定点調査することで、保存、修復、デジタル公開という東洋文庫の基本事業により結びついた紙質調査に取り組むこととした。また、嘱託研究員の中村威也氏の渡欧に際し、イギリスの Victoria & Albert Museum(8月23日)所蔵の江戸末期～明治の和紙について調査を実施し、今後の紙質調査においても同館の協力を得られることとなった。

古地図研究グループでは、これまで『大明地理之図』4軸(細谷良夫研究員寄贈、文化11年(1814)に模写されたもの)を手がかりとして、外部の古地図研究者等を招いて学際的な研究会を開催してきたが、山国神社(京都市右京区京北)所蔵の『大明地理之図』(延宝9年(1681)書写の原本をもとに元禄3年(1690)に模写されたもの)の存在が明らかとなり、10月5～6日にウイングス京都(京都市中京区)で開催された「京都山国展」にて本図の複製が展示されたのを機に参観・調査を行い、東洋文庫の細谷本と同系統の資料であることを確認した。11月16～17日、山国神社にて、本図の解説作成等に当たった天理大学国際学部教授の藤田明良氏等と打ち合わせを行い、2月12日には藤田教授を東洋

文庫に招いて「山国郷の『大明地理之図』とその周辺」の題目で研究報告していただくとともに、画像データを共有するなどして連携して比較研究を進めることを検討した。

3月11日、京都大学文学研究科教授の中砂明徳氏より、京都大学文学研究科図書館に『大明省図』2枚(今西春秋旧蔵、書写年不明)が所蔵されるとの情報を得、東洋文庫の大澤顯浩、高橋公明、濱下武志、中見立夫、村井章介、渡辺紘良各研究員、相原佳之嘱託研究員、多々良圭介奨励研究員、および天理大学の藤田明良教授の9名で閲覧調査を行った。本図は、東洋文庫や山国神社所蔵の『大明地理之図』とは別系統のものとして推定されるものの、近世日本における東アジア認識を研究するために格好の資料であることを確認した。また、今後の紙質調査実施を念頭に、接写用カメラでサンプル的に撮影した。



京都大学における『大明省図』調査の様子

現代中国研究では、東洋文庫近代中国研究委員会編『明治以降日本人の中国旅行記(解題)』(東洋文庫、1980年)の続補として、東洋文庫が所蔵する日本人中国旅行記(1950～80年代)を再点検し、文献目録と解題の作成を継続した(2020年度にWEB公開の予定)。経済グループでは、愛知大学名古屋校舎で開催された中国経済経営学会の場で、毛沢東時代の経済制度と政策に関する研究成果を報告し、参加者と討論を行った(2020年度は過去数年に報告・議論されてきた論文をまとめ、2021年に名古屋大学出版会から出版の予定)。

現代イスラーム研究では、中東・中央アジアの歴史的に重要な諸法令を翻訳して順次データベース化してWEB公開する作業の一環として、トルコグループでは粕谷元編『トルコにおける議会制の展開』(東洋文庫、2007年)所収のオスマン帝国憲法(1876年)・トルコ共和国憲法(1924年)、八尾師誠・池田美佐子・粕谷元編『全訳 イラン・エジプト・トルコ議会内規』(東洋文庫、2014年)所収のトルコ大国民議会内規(1927年)を必要に応じて改訳するとともに、これらに注釈と解題を付す作業を進めた。その結果、オスマン帝国憲法(1876年)とトルコ共和国憲法(1924年)の翻訳を完成させた(2020年度前半に公開の予定)。イラングループでは、イラン憲法(1906年基本法と1907年補則)の翻訳および注釈を付す作業を行い、全条の下訳を終了した。アラブグループでは、エジプト憲法(1923年)の翻訳および注釈を付す作業を行い、全条の下訳を終了した。これらの作業のために、グループ別の訳文検討会(イラングループ2回、アラブグループ6回)を開催した。「シャリーアと近代:オスマン民法典研究会」(代表:大河原知樹研究員)は研究会を6回開催し、オスマン民法典(メジェッレ)のアラビア語版の日本語翻訳・検討を行うとともに、語彙集の作成を進めた。

東アジア研究では、前近代中国・近代中国・東北アジア・日本の4研究班を組織し、分担してアジア基礎資料研究に取り組んだ。

前近代中国研究班では、中国古代史研究の深化のため、文献史料の精密な理解と新出史料の利用の双方が必要であることから、原則、月2回研究会を開催して、東洋文庫所蔵の豊富な中国地方志資料および東洋文庫のインターネット機能を活用し、文献史料として『水経注疏』巻10濁漳水編の精読を進めるとともに、新出史料として『張家山漢簡』津関令・『嶽麓書院藏秦簡』亡律の講読と研究を進めた。また、長期に滞在する外国人研究者張鵬飛氏(広東省警察大学院文学部写作研究室主任)を受け入れ、研究会等を通じて学術交流を行った(【東ア-1】)。なお、略号については、p.22「アジア基礎資料研究のための6部門13研究班20テーマ」を参照。以下同)。

韓国中部・南部地域における原三国時代～三国時代の出土資料調査を行った。具体的には、慶尚南道昌寧郡校洞古墳群・咸安郡末伊山古墳群、慶尚北道高靈郡池山洞古墳群出土の加耶関係資料、仁川市黔丹遺跡、忠清北道清州市松節洞遺跡・五松遺跡出土の馬韓・百濟関係資料等を調査した。また、末伊山古墳群と校洞古墳群については、発掘調査現場の視察も行った。これらに関連して、原三国～三国時代の発掘調査報告書を収集した。韓国現地資料調査において、忠北大学校史学科・博物館、東亜大学校考古美術史学科・博物館、国立清州博物館、国立加耶

文化財研究所、東亜細亜文化財研究院、大東文化財研究院の協力を得た。このうち、東亜細亜文化財研究院とは国際シンポジウムの開催等、共同研究を進めていくことで合意した。今後も協力機関を増やして国際交流を強化する（【東ア-2】）。

明代の日用類書『新刻天下四民便覧三台萬用正宗』巻21商旅門のほぼ9割の訳注作業を終えた。さらに同書巻26医学門のほぼ3分の1の訳注作業を終え、動植物・鉱物由来の217項目の薬の一覧表を作成した。同書巻39僧道門もほぼ3分の1の訳注作業を終えた。また、大澤正昭研究員は東洋文庫リポジトリ「ERNEST」に公開中の『明代日用類書研究論文・著作目録稿』（2019年1月）に対して補訂を行い、中文版同目録稿（大澤正昭監修・杉浦廣子編）を『中国古代法律文献研究』第13輯（2019年12月）に掲載した（【東ア-3】）。2018年度に刊行した『中国近世法制史料読解ハンドブック』に続き、若手研究者の養成のためのプログラムとして、新たな研究啓蒙書の作成計画を立て、その準備のための報告会を3回にわたって実施した（【東ア-4】）。

近代中国研究班では、20世紀前半日本の中国調査研究機関に関する資料について、国内研究機関の所蔵資料の分析を進めた。なお、2020年1月より、中国・台湾において新型コロナウイルスの感染が拡大したため、中国・台湾での共同研究・調査を実施することができなかった（【東ア-5】）。

東北アジア研究班では、戸籍関係資料と帳簿類など冊子体の各種公私記録類について、東京大学総合図書館所蔵資料を対象に書誌学的調査を行うとともに、吉田光男研究員を韓国に派遣して、韓国の研究者との情報交換や大学図書館等での文献調査を実施した。データベース化に向けて、既刊『日本所在朝鮮戸籍関係資料解題』（東洋文庫、2004年）および『日本所在近世朝鮮記録類解題』（東洋文庫、2009年）を編集した際の調査データ（電子データと手書きのノート類）の整理を行った（【東ア-6】）。東洋文庫所蔵の「鑲紅旗檔」、及び「鑲白旗檔」をはじめとする清朝満洲語文書資料に関する研究を進めるとともに、中国における当該研究の中心の一つである吉林師範大学満学研究所との間で「学術研究交流に関する覚書」を締結し、具体的な学術研究交流の準備を進めた。1980年代以降に所属研究員が実施した、中国東北部、新疆ウイグル自治区、モンゴル、そしてロシア極東をはじめとする調査の画像・映像資料等に対して整理・研究した成果の一部を、2020年度に刊行物の形で公開するべく、準備を進めた（【東ア-7】）。清代支配構造の基盤解明の一環として遼寧省で調査した『旗地則例』類の読解・検証作業を継続した。また東洋文庫所蔵の孤本清代『壇廟祭祀節次』の検証作業を通じて生じた「天朝」としての正統性を主張する政策をめぐる新たな問題点の検証が次年度以降に残された。そのため、TBRL『清代諸領域の歴史的構造分析1／清朝初期政治史研究(1)』、TBRL『清代諸領域の歴史的構造分析2／清朝祭祀儀礼研究(1)『壇廟祭祀節次』』の出版計画を延期することとなった。また、東洋文庫ミュージアム「大清帝国展」の展示に協力した（【東ア-8】）。

日本研究班では、仮名草子を中心とした『岩崎文庫貴重書書誌解題X』の公刊に向けての準備作業を開始した。『岩崎文庫和漢書目録』に著録される「仮名草子」79点を確認し、岩崎文庫全体から「仮名草子」として取り上げるべき資料を検討・選択した（【東ア-9】）。

内陸アジア研究では、中央アジア・チベットの2研究班を組織し、分担してアジア基礎資料研究に取り組んだ。

中央アジア研究班では、東洋文庫が所有するロシア・サンクトペテルブルクの IOM (Institute of Oriental Manuscripts) 所蔵古文書のマイクロフィルムのカatalogueについて、2018年度末に IOM 当局と開始した協議が2019年度初めに合意に達し、東洋文庫と IOM との共同編集により3年計画で *Catalogue of the Uygur and Chinese/Uygur manuscripts and xylographs of the Serindia Collection in the IOM RAS* (仮題) を出版することとなった。2019年度は第1巻として既発表の写本・木版資料のカatalogue編集を行い、東洋文庫側が提供したデータを IOM 側が統合して用意したイントロダクション・カatalogue本体・ビブリオグラフィの原稿について修正・加筆を進めた。その他、トルファン の未公開資料に関して、研究成果情報の収集に努めた（【内陸-1】）。近現代中央ユーラシア定期刊行物研究会を3回開催し、20世紀初頭の雑誌『シューラー』、『トルキスタン地方新聞』、『アーイナ』等に掲載されたテュルク語の論説を講読した。その成果は、日本語訳注という形で東洋文庫リポジトリ「ERNEST」に公開する予定である。本研究会のメンバーと以前から協力関係にある、ロシアのカザン連邦大学教授ディリヤラ・ウスマーノヴァ氏の来日を機会として、2月4日に講演会「極東・新疆へのテュルク・タタール系移住者による1920-40年代の教科書・教材の出

版：比較評価」(Издание учебников и учебной литературы представителями тюрко-татарской эмиграции Дальнего Востока и Синьцзяна в 1920-1940-х гг.: сравнительная характеристика)を開催し、極東におけるタタール語定期刊行物についても検討がなされた(【内陸-2】)。

日本はかつて敦煌・吐魯番文書やその文物の研究で世界をリードしてきたが、今日では衰退傾向にある。この現状を変えて再び世界をリードしていくためには、共同研究を着実に進め、中堅・若手研究者を一人でも多く育て、研究成果を発表していくしかない。東洋文庫はこの分野で多くの文書研究の成果を上げているものの、戦前来、日本国内の諸機関や個人に所蔵されてきた多数の文書類について、その所蔵状況や内容の系統的把握と集約が十分でない点が課題として残っていた。中国ではこの課題に着手し始めているが、本来これは日本側の研究者が責任を持ってなすべき仕事である。そこで、2019年度は、濱田徳海氏(1899～1958)旧蔵の敦煌関係文書、所謂「濱田徳海敦煌文書コレクション」の整理と考察を進め、『濱田徳海旧蔵敦煌文書コレクション目録』を刊行した(pp.17～18「(4)研究成果の刊行・発信の強化」を参照)。また、長年敦煌文書の研究に従事してきた土肥義和(2020年3月14日逝去)が遺された膨大な文書整理ノート(ダンボール10箱)が2017年度に寄託された。これらは敦煌文書の研究に貴重な手がかりとなる調査ノートであり、その全容把握とデータベース化のために、部分的に整理を進めた。上記の研究活動の拠点として、内陸アジア古文献研究会を全3回開催した(【内陸-3】)。

チベット研究班では、チベットの歴史、言語、宗教(仏教・ボン教)、社会に関する一次資料の基礎研究として、ウパロセル編纂『大蔵経テンギユル目録』、トゥカン著『西藏仏教宗義』、中央アジア出土チベット語文献、シャン・タンサクパ著『中観明句論註釈』を研究した。このうちウパロセル編纂『大蔵経テンギユル目録』については、御牧克己(京都大学教授)、オルナ・アルモギ氏(ハンブルク大学研究員)が国際共同研究を進め、成果の刊行準備を進めたほか、トゥカン著『西藏仏教宗義』第11巻、シャン・タンサクパ著『中観明句論註釈』第3巻の刊行準備を行った(【内陸-4】)。

インド・東南アジア研究では、インド・東南アジアの2研究班を組織し、分担してアジア基礎資料研究に取り組んだ。

インド研究班では、12～16世紀北インドのヒンドゥー王権の銅板文書を中心とした史料研究、近世ムガル帝国の史料目録の作成の一環としての公文書の研究、南インド10～16世紀のヒンドゥー王権の公文書(碑文・銅板文書)を中心とした史料研究を継続した。また、各々の研究分野での近年の研究を中心とした文献目録の作成に取り組んだ。予定していたイギリス・ロンドンでの海外調査は、小名康之(病氣療養のため次年度以降に延期となった)が1月25日に研究会を開催し、栗山保之、太田信宏の両研究員が研究発表を行った(【南ア】)。

東南アジア研究班では、「近世東南アジアをめぐる旅行記史料の研究」テーマを推進するため、原則、月3回の研究会を開催した。年度の前半は、昨年度から講読してきた A. Hamilton, *A New Account of the East Indies, vol. 1* の東南アジアをめぐる記述を輪読した。17世紀終わりから18世紀に東南アジアに寄港したハミルトンが、現地人や港市に滞在したヨーロッパ人を含む他の外来系住民との交流を通して、いかなる東南アジア社会像を形成したか検討した。後半は、17世紀の終わりにサファヴィー朝下のペルシアからシャムのアユタヤ朝に赴いたペルシア使節の航海記 *The Ship of Sulaiman*, (tr. by John O' Kane) の Introduction と本文の Part I のペルシアを出発しインドに至るまでを輪読した。ペルシア人の航海記の記述の仕方、当時のインド洋海域世界の港市をめぐる記述を検討した。また前近代の東南アジア社会を検討するための重要な資料となる、東洋文庫所蔵の故仲田浩三氏収集の東南アジア島嶼部を中心とする碑文拓本と関係資料の整理を進めた。その目録『東南アジア島嶼部を中心とする碑文拓本と関係資料』を2020年度に出版するべく準備を進めた(【東南】)。

西アジア研究では、東洋文庫が2015年に購入したヴェラム文書(モロッコの皮紙契約文書)11点の校訂・研究(第二期)のため、月例研究会および集中研究会(弘前大学)を実施し、ヴ

エラム文書7点のアラビア語校訂テキストおよび英文解説を完成した（【西ア】）。

資料研究では、台湾の中央研究院歴史語言研究所との交流協定（2015～20年度）に基づき、同研究所から漢籍電子文献資料庫（データベース、約7億字）の提供を受けた。その対価として、文庫所蔵貴重洋書、10,000コマのデジタルデータを提供した。また、中国大陸の研究者1名を招聘し、データベースに関して研究交流を行った。

各種研究会・講演会の開催状況は、下記のとおりである。

件数／人数	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
研究会数	29	27	33	33	17	26	31	39	26
参加人数	202	189	360	269	102	214	247	482	226

1月	2月	3月	計
22	16	13	312
255	123	54	2,723

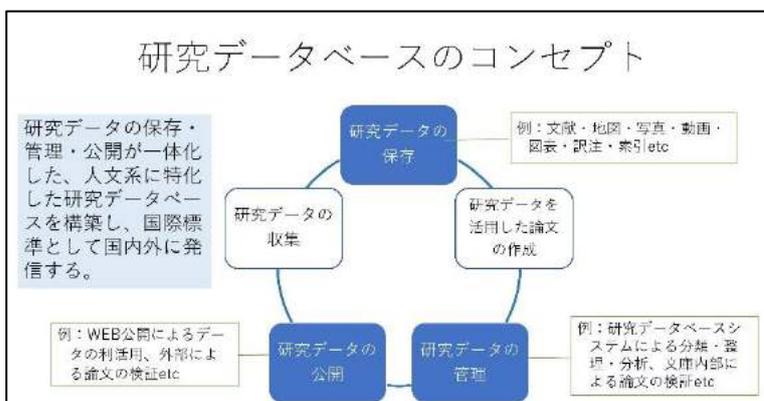
（2）総合的アジア研究データベースの推進（開発期）

担当：會谷佳光
相原佳之

全研究班が参画する**総合アジア圏域研究**では、研究部執行部の研究データベース共同研究担当者が中心となって研究データベースの構築をより一層推進するため、11月21日、研究データベース会議を開催した。東洋文庫奨励研究員の多々良圭介氏が「メディカルレポートデータベース案」、東京大学情報基盤センター助教の中村覚氏が「画像共有のための国際規格IIIFとその研究活用」、東洋文庫嘱託研究員の相原佳之氏が「東洋文庫のデータベース構築の現状について」という題目でそれぞれが報告を行った後、日本学術振興会特別研究員PDの井上弘樹氏（元東洋文庫研究部臨時職員）が飯島渉研究員とともに取り組んでいる感染症アーカイブズ (<https://aidh.jp/>) について報告を行い、質疑応答を行った。参加者は16名。東洋文庫所属の研究員に限定せず、研究班・研究グループの枠組みを超えて、広く研究者、特に若手研究者の参加を呼びかけた。



研究部の取り組む研究データベースは蔵書資料のデジタル化とは異なり、東洋文庫の研究員・研究班の長年にわたる資料調査・研究活動の研究成果（論文、著作、索引、訳注、図表など）およびその副産物として収集・作成された研究データ資源を、保存・管理・公開するためのデータベース・システムであり、研究データベース会議を基盤に、研究データベース



共同研究担当者が研究班・研究グループと協力して所蔵資料のデジタル撮影、およびメタデータ等の作成を進めると同時に、中村覚氏（東京大学情報基盤センター学術情報研究部門助教）と協同してシステム開発に取り組んだ。

研究データベース全体のタイムスケジュールについては、下図で示したように、2015～2017年度の試行期を経て、2018～2020年度は、第二段階の「開発期」に位置づけ、研究データベース会議を基盤に研究データベースの開発を進め、共通のフォーマットに基づくプラットフォームを持ち、地域横断的かつ通時代的な汎用性の高い横断検索システムを完成させ、システム開発、およびデータ収集・整理に取り組み、2020年度までの公開を目指している。画像データについてはIIIF（International Image Interoperability Framework）を導入し、テキストデータについてはTEI（Text Encoding Initiative）を導入するなど、国際規格に準拠したものとすることで、国立情報学研究所（NII）、アメリカのハーバード・エンチン研究所等、国内外の関係諸機関との連携も視野に入れている。2021年度以降は、第三段階の「発展期」に位置づけ、各研究データベースのデータの拡充、システムの改修に不断に取り組んでいく。



東洋文庫の刊行物のデジタル化公開をより一層推進するため、2018年9月、東洋文庫リポジトリ「ERNEST」を新システム「JAIROCloud」に移行して以降、データの充実に努め（<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/>）、『東洋文庫書報』のバックナンバー（273件）を追加するなど、3月末時点での論文等の登録件数は計4,496件に達した（うち非公開39件。2018年度より579件増）。今後、研究員の研究成果やその副産物を保存管理するための受け皿としても活用していく。

2019年度東洋文庫リポジトリ「ERNEST」利用統計

年 月	検 索	閲 覧	ダウンロード
2019年4月	1,345	3,386	4,029
5月	1,639	4,924	6,605
6月	1,070	7,137	7,859
7月	958	4,275	6,493
8月	916	3,670	7,007
9月	1,659	7,055	10,461
10月	1,003	3,067	11,568
11月	950	3,202	5,411
12月	1,349	3,680	6,938
2020年1月	818	3,289	6,353
2月	769	2,497	4,737
3月	1,499	2,918	5,850
合 計	13,975	49,100	83,311

〔研究実施概要〕

現代イスラーム研究では、「日本における中東・イスラーム研究文献DB」のアップデートを日本中東学会と連携して継続し、1,300件の新文献を「イスラーム地域研究資料室サイト」に掲載し、データベース文献総件数は58,620件（3月末）となった。年間のアクセス数については、

後掲の「2019年度研究データベース・アクセス数」を参照。

東アジア研究では、中国古代史・歴史地理学の基本資料である『水経注図』（楊守敬・熊会貞撰、光緒31年（1905）宜都楊氏觀海堂刊本朱墨套印、全8冊）を全冊カラー撮影した。2020年度中に、地名・記述・位置情報を付与し、かつ345コマにのぼる画像を1枚に接合した上で、中村覚氏（前出）の協力のもと、研究データベースとして公開・活用する予定である（【東ア-1】）。朝鮮半島における原三国時代～三国時代遺跡のデータベースの作成を継続した。とくに2019年度は新たに入手した松節洞遺跡と五松遺跡など馬韓・百済の集落および墳墓に関する資料について、マイクロソフト Access を利用してデータベース化に取り組んだ（【東ア-2】）。

「中国社会経済・基層社会用語のデータベース化」グループでは、前近代中国の歴史および転変の流れを、根本史料に即しつつも、表層と基層の史料を相関させて考察して、実態、実相を復元して学界に提供するため、中国史の史料学における基礎作業として、目下の作業の焦点を【基層の社会経済についての用語解の編纂とデータベース化】に置いている。今日、旧中国の伝統文化、経済史、社会史、法制史に関心を持つ研究者、読者は増大しているが、既存の辞書のほとんどは伝統漢学を読解する工具として編纂されており、世相の実態、真相についての知識を求める人々が、随時坐右に参照できる用語解・術語解はこれまで存在しなかった。東洋文庫では開設以来《歴代正史食貨志訳註》と題する事業を継続させ、10種の《正史食貨志》本文の訓読と詳しい注釈を蓄積し、〈論叢シリーズ〉として2009年までに『宋史食貨志訳註』（一）～（六）・索引、計7冊（総頁数3,997頁）を公刊してきた。本研究はこの永年の蓄積に基礎を置きつつも、近年、史料学としてまた研究領域として開けてきた新しい分野の成果をも参照して、財政経済、社会文化、法制史、農業史、商業史の諸分野にわたる文献の訓読と注解を続行させ、その成果を逐次データベースとして公開しつつ、2023年に『増補改訂版 中国社会経済史用語解』（唐奨基金）を出版することを計画している。2019年度は『中国社会経済史用語解』（法制篇）Ⅰの約12,000語にわたる用語解説データの入力、及び第一レイヤ～第三レイヤの項目分類をほぼ完了し、研究データベース公開に向けて分類・解説文章の補訂等の追加作業を継続した。

『新刻天下四民便覧三台萬用正宗』巻21商旅門、及び東北大学・狩野文庫蔵『商賈指南』の語釈1,219項目を整理し、研究データベース公開に向けての補訂作業を継続した（【東ア-3】）。大島立子編『前近代中国の法と社会 成果と課題』（東洋文庫、2009年）所収の小川快之編「宋一清代法秩序民事法関係文献目録」について、現在までの関係文献の情報を増補し、これまでの目録情報と併せてデータベース化するための準備を継続した（【東ア-4】）。

近代中国研究班では、戦前期華中南における中国共産党の活動を分析した「日森虎雄研究所資料」772件について、画像データ化と Excel シート上での整理が完了し、公開に向けた準備を進めた（【東ア-5】）。

東北アジア研究班では、いままで所属研究員が1980年代以降に実施した、中国東北部、新疆ウイグル自治区、モンゴル、ロシア極東等における調査の画像・映像資料等に対して整理・研究を行った。2018年度は、これら中国各地で集積した満族（清朝）関係の画像・映像データ、パンフレット、地図等の資料を、体系的に整理・研究して、データベース構築の準備作業を進めた（【東ア-7】）。クリスチャン・ダニエルズ研究員が中国雲南省で収集して東洋文庫に寄贈した碑文資料162件について目録整理、碑文の翻字を進めるとともに、IIIF による画像公開とアノテーション機能による積文の付加について検討を進めた（【東ア-8】）。

日本研究班では、『岩崎文庫貴重書書誌解題X』掲載予定の仮名草子のうち、東洋文庫・日本古典文学会編『菱川師宣絵本』（貴重書刊行会、1974年）にてモノクロで影印出版された岩崎文庫所蔵菱川師宣絵本等10件17冊について、研究データベースとして活用するためにカラーデジタル画像を撮影した（326コマ）。これらの画像は、今後、東洋文庫のデータベース上に公開する予定である（【東ア-9】）。

内陸アジア研究のうち中央アジア研究班では、*Catalogue of the Uygur and Chinese/Uygur manuscripts and xylographs of the Serindia Collection in the IOM RAS*（仮称）第1巻の編集作業に際して生じたデータ変更について、東洋文庫独自のデータベース「東洋文庫 Uyghur DB（非公開）」に反映する準備を整えた（【内陸-1】）。チベット研究班では、東洋文庫所蔵河口慧海請来チ

ベトナム語文献のデータベース化を推進した。(1) 河口慧海請来写本大蔵經の宝積部2巻(全体の55~56巻、計797コマ)のデジタル画像を撮影した。これにより『宝積部』全6巻の画像データベースに基づく研究データベースの構築が可能となった。さらに華嚴部全6巻中4巻(全体の45~48巻、計1,684コマ)のデジタル画像を撮影した。(2) 河口慧海請来チベット語蔵外文献写本の解読作業を進め、チベット語活字体テキストとして入力し、研究データベースの作成を行い、そのうち5点を Tibetan E-Texts として東洋文庫リポジトリ「ERNEST」に公開した(下記)【内陸-4】。



チベット写本大蔵經のデジタル画像

- 蔵外399 : <http://doi.org/10.24739/00007268>
- 蔵外408 : <http://doi.org/10.24739/00007270>
- 蔵外411 : <http://doi.org/10.24739/00007271>
- 蔵外431 : <http://doi.org/10.24739/00007272>
- 蔵外454 : <http://doi.org/10.24739/00007274>

インド・東南アジア研究のうち**東南アジア研究班**では、既刊の『東洋文庫所蔵東南アジア関係欧文図書目録』・『モリソン2世文献目録』・『山本達郎博士寄贈書目録』をもとに、「東洋文庫所蔵東南アジア関係旅行記文献目録」を Excel で作成した(全597件)。目録に挙げられた文献は、近世のみならず近代も含まれる【東南】。

資料研究では、現地調査によって得られた写真・録画・文献資料の電子データ化、及びデータベース化とその公開を実施した。

(一) 写真

梅原考古資料26,000件につき、年次計画に従って、電子化、公開を実施してきているが、今年度は、前年度の縄文時代に引き続き、弥生時代の資料2,774件をデータベースに構成し、電子化して公開した(山村義照研究員担当、登録制)。

http://124.33.215.236/umeharayoyoi/umejpyayoi_open_srchinput.php



梅原考古資料日本 弥生時代画像データベース

(二) 動画

登録制により、中国地方劇の DVD につき、動画961件を公開した(田仲一成研究員蒐集)。

<http://122.216.204.236/dvdopen/dvdopen.php>

2019年度研究データベース・アクセス数													
データベース名	2019年4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	2020年1月	2月	3月	計
中國經濟史用語DB	10,280	10,624	10,884	11,297	10,884	10,915	11,584	11,188	11,576	11,492	10,742	11,378	132,744
宋会要輯稿食貨編 社会経済用語DB	14,964	15,473	15,976	16,615	15,986	16,083	17,027	16,388	16,953	16,923	15,814	16,787	194,989
梅原郁編『唐宋編 年語彙索引』DB	5,015	5,184	5,017	5,290	5,017	5,087	5,559	5,342	5,527	5,497	5,140	5,453	63,128
新版唐代墓誌所在 総合目録（増補 版）DB	1,666	1,723	1,668	1,825	1,669	1,861	2,125	2,050	2,123	2,111	1,973	2,101	22,895
日本における中 東・イスラーム研 究文献DB	※2019年4月～2020年3月の期間統計												
梅原考古資料 日本縄文時代之部	8,551	11,419	15,140	15,660	22,153	25,574	31,245	35,258	42,867	43,310	40,605	43,203	334,985
同 弥生時代之部	—	—	—	—	—	—	—	561	17,562	37,763	35,489	37,764	129,139

(3) 国際シンポジウム・ワークショップの開催による国際発信と国際交流の推進

担当：會谷佳光
相原佳之
太田啓子

上記(1)(2)の諸活動によって得られた最新の研究成果を、国際シンポジウム・ワークショップを開催して、広く国際的に発信することで、世界のアジア研究の進展に大きく貢献すべく取り組んだ。その一方で、アジア諸地域の現地研究機関・図書館との学術交流を積極的に推進することで、新たな分野の資料群を探索・収集し、研究図書館としての東洋文庫の一層の充実に取り組んだ。

国際シンポジウムの運営全般、および総合アジア圏域研究班の諸活動に携わって研究活動を補助する人材、および欧文による成果発信を強化するための人材を確保・育成すべく取り組んだ。

〔研究実施概要〕

総合アジア圏域研究では、現代イスラーム研究班の粕谷元研究員のコーディネートによって、12月14日、第8回総合アジア圏域研究国際シンポジウム“Structural Changes in the Modern Middle East: Revolution, Constitution, Parliament”を開催した。報告者として、海外留学中の若手研究者2名をはじめ、イラン・トルコ等から外国人研究者4名を招聘して、3つのセッション(1: Islam and Search for Democratization, 2: Islam and Politics, 3: Justice and Society)を設けて発表・コメントを行った。参加人数は、報告者・関係者を含め延べ33人。また例年どおりオンラインジャーナル *Modern Asian Studies Review* / 新たなアジア研究に向けて vol. 11に国際シンポジウムの要旨等を掲載した(https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1334)。

1月18日・19日、ハーバード・エンチン研究所(リンダ・グローブハーバード・エンチン研究所日本代表、東洋文庫研究員)と東洋文庫(濱下研究部長)の共催で、ハーバード・エンチン研究所の alumni でもある東京大学東洋文化研究所の大木康教授・慶應義塾大学の浅見雅一教授と共同して、国際シンポジウム“Books as Texts and as Objects: The Production, Circulation, and Collection of Knowledge in Asia and Europe”を開催した。プログラムは、基調報告、3つのセッション(1: Materiality of Books and Book Production, 2: Transmission of Ideas through the Circulation of books, 3: Archives, Creation of Collections and Libraries)で構成した。また18日には、各報告内容に関連した資料計19点の展示を行い、19日のセッション終了後には、ス波義信文庫長が東洋文庫の草創期について講演した。参加人数は、18日が55名、19日が47名(報告者・関係者含む)。



ハーバード・エンチン研究所と共催した
国際シンポジウムの様子

上記シンポジウムの当日のプログラムについては、IV. 普及活動-A. 研究情報普及-2. 東洋文庫公開講座・公開研究会を参照。

2020年度開催予定の国際シンポジウムについて、コーディネートを担当する中央アジア研究班「非漢字諸語出土古文献の研究」・「日本所在の敦煌・吐魯番文書の整理と研究」両グループと協議を進めた。(1) ロシア科学アカデミー東洋写本研究所(IOM)との間でIOMカタログ刊行のための共同編集出版の協定が成立したこと、(2) 2019年度に『濱田徳海旧蔵敦煌文書コレクション目録』を刊行したことを受け、「内陸アジア古文書研究アーカイブの役割：敦煌・トルファン出土古文献をめぐって」(仮)をテーマに、2~3のセッションを設けて、2日間にわたって開催する方針を定めた。

現代中国研究では、政治・外交グループが、9月9日に北京大学教授牛大勇氏を迎えて公開セミナー「1972年米中首脳会談から見る米中関係における日本問題の原点」を主催した。国際関係・文化グループは、11月30日・12月1日に華東師範大学との共催で、同大学歴史系会議室にて、第8回日中共同研究「中国当代史研究」ワークショップを開催し、1950~80年代の中国政治・外交・経済・社会・文化・思想をテーマに5つのセッションを設けて報告・コメント・総合討論を行い、東洋文庫からは小野寺史郎研究員がコメンテーターとして参加した。また、4月6日、カリフォルニア大学サンタバーバラ校の鄭

小威氏、8月3日、香港樹仁大学の区志堅氏を招いて研究報告会を行い、今後東洋文庫の「遺産」を米国および香港に発信する基盤を整えた。

東アジア研究のうち前近代中国研究班では、「中国社会経済・基層社会用語のデータベース化」グループが、『増補改訂版 中国社会経済史用語解』(唐奨基金)の公刊される時期(2023年度)の前後を目処に、国際シンポジウムの開催について検討した。過去・現在の中国に対して強い関心が集まり、国際的に中国研究者が増大するなか、中国史、中国史料そのものへのアクセスが容易でないとされている。その理由の一つとして、中国語の習熟の困難さと、中国史では史的かつ制度的枠組みが複雑で独自であることが挙げられている。欧米では早くからシナ学の伝統が築かれたためか、中国史やその史料学についての理解や教育法に対する工夫が進んでいる。将来、中国本土、台湾、欧米の専門家を招き、日本で行われているような訓読法をベースにした読解力や、中国学の促進に資する若手研究者の訓練法をめぐって意見の交換がなされることを期待するが、本研究グループの(用語解)をめぐる努力も、そうした試みにおいては、有力な話題を提供できると考えている(【東ア-3】)。研究成果の一般への普及を目的に、「宋以後の法令分析を通じた中国前近代社会の構造解明」グループが前期東洋学講座「中国法制史料読解入門」を開催し(【東ア-4】)、「中国古代地域史研究」グループが後期東洋学講座「木簡・竹簡資料への誘い(いざない)」を開催した(【東ア-1】)。当日のプログラムについては、IV. 普及活動-A. 研究情報普及-1. 東洋学講座を参照。

なお、近代中国研究班では、3月4日にシンポジウム「戦前期日本の華中・華南調査」の開催を予定していたが、日本国内で新型コロナウイルスの感染が拡大したため、2020年の開催を取り止めた。各報告については、日本語と中国語のレジュメ作成を完了した(【東ア-5】)。

内陸アジア研究のうちチベット研究班では、2020年9月にチベット大蔵経とその研究史をテーマに国際ワークショップを開催することを検討した(【内陸-4】)。

インド・東南アジア研究のうち東南アジア研究班では、ジャカルタのインドネシア学術研究院を訪れ、近年のインドネシアにおける地域研究や歴史研究について情報収集し、将来の国際シンポジウムの開催の可能性を検討した(【東南】)。

(4) 研究成果の刊行・発信の強化

担当：中村威也
小澤一郎

資料調査・研究の検討過程や研究成果、および国際シンポジウム・ワークショップの内容を紙媒体・電子媒体によって発信する。特に国際シンポジウムはその速報性を重視して、開催年度にオンラインジャーナル *Modern Asian Studies Review* / 新たなアジア研究に向けて(https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1052)で概要を発信し、翌年度以降に紙媒体で報告論文集を刊行する。また、従来の和文・欧文による発信を一層推進するとともに、新たに中国語による発信を加えることで、多言語による研究成果の国際発信力を強化し、資料交流・人的交流・国際交流に資すべく取り組んだ。

また、出版物の質的向上をはかるため、東洋学の知識と編集校閲技能を兼ね備えた人材を確保・育成し、かつ日本語論文を英訳するネイティブ・スピーカーの協力を得た。

これらの出版物ならびに電子ジャーナルは、日本・アジア・欧米を結ぶアジア研究の国際交流をさらに促進するものとなる。

[研究実施概要]

東アジア研究のうち近代中国研究班では、研究成果発表の場として『近代中国研究彙報』第42号を刊行した(【東ア-5】)。

内陸アジア研究のうち中央アジア研究班では、濱田徳海(1899~1958)旧蔵の敦煌文書コレクションの整理と考察を進め、『濱田徳海旧蔵敦煌文書コレクション目録』を刊行した。これは大蔵官僚であった濱田氏が戦中戦後にかけて私財を投じて購入した全180点余の敦煌文書コレクションであり、氏の没後一部は国立国会図書館に購入されたが、未購入に終わった残りの大

部分が近年中国に流出することになった。東洋文庫は濱田氏の没後まもなく本コレクションの扱いと整理に関与した経緯もあって、残された目録データを整理し直し、報告書にまとめたものである。内容は、研究協力者の速水大氏の整理にかかわる目録部分と、「石塚晴通氏調査記録」、岩本篤志「浜田徳海の敦煌写経の蒐集とそのコレクションの性格」からなる（【内陸・3】）。

インド・東南アジア研究のうち**東南アジア研究班**では、2015～17年度の研究テーマ「近現代東南アジア史料研究」と2018年度より進展中の「近世東南アジアをめぐる旅行記史料の研究」の研究成果をまとめ、TBRL 21としてHIROSUE Masashi ed., *A History of the Social Integration of Visitors, Migrants, and Colonizers In Southeast Asia: Role of Local Collaborators*を本年度刊行した（【東南】）。

西アジア研究では、ヴェラム文書研究（第2期、2016～19年）の成果として、TBRL22としてMIURA Toru & SATO Kentaro ed., *The Vellum Contract Documents in Morocco in the Sixteenth to Nineteenth Centuries, Part II*を刊行した。ヴェラム文書7点（フェス）の校訂と解説のほか、英文論文3点（うち1本はライデン大学 Léon Buskens 教授の寄稿）によって構成され、不動産の売買・賃貸借・寄進に係わる法手続きと農園などの所有の実態を明らかにするものである。Part Iの出版（2015年）後、モロッコ国立図書館におけるモロッコの研究者との合同研究会の開催など、本資料についての国際的な関心の高まりに応える成果である（【西ア】）。

(5) 若手研究者の育成

担当: 會谷佳光
相原佳之

東洋文庫では、若手研究者の育成にあたり、常に公益性を重視して、東洋文庫の内部にとどまらず、東洋学の伝統を継承・発展させていくことで、将来にわたって世界の研究者を裨益し、アジアで育まれてきた人類の叡智を広く市民に還元することを目指している。そこで、下記の若手研究者の育成にかかわる取り組みを通して、若手研究者が自発的な研究活動等を行えるよう支援した。

〈科学研究費の応募資格を持たない者に対する支援〉

東洋文庫で研究補助等の業務に従事する若手研究者のうち科学研究費の応募資格を持たない者が、日本学術振興会の科学研究費助成事業(科学研究費補助金)「奨励研究」に申請して教育的・社会的意義を有する研究に取り組む場合、所属機関として「奨励研究」にかかわる諸手続・管理を承諾することで、その研究を積極的に支援する。

〈東洋文庫奨励研究員の任用〉

博士後期課程修了者については、公募・内部推薦を併用してポストドクターを選抜して「東洋文庫奨励研究員」に任用して科学研究費の応募資格を与え、東洋文庫研究員に準ずる者として『東洋文庫年報』の「役職員名簿」にも掲載し、東洋文庫の資料を広範に利用できるような待遇面の向上を行うと同時に、研究班・研究グループのメンバーとして資料研究・アジア現地資料調査・国際会議に参加するなど実践的な研究指導を行うことで、研究者としての早期の自立を促すなど、若手研究者の育成・雇用促進を進める。

〈インターンシップ活動等の実施〉

研究者育成のためのインターンシップ活動として、ハーバード・エンチン研究所の研修プログラムへの参加や、若手研究発信支援プログラムによる英語論文の作成指導などを実施する。

〈東洋文庫諸事業への参画による実務経験の蓄積〉

奨励研究員経験者を、国際共同研究や国際シンポジウムなど東洋文庫の各種の公開学術活動に積極的に登用し、アジア各地における日本人研究者雇用のニーズに応える。並行して、若手研究者の参加に基づき東洋文庫の研究図書館としての機能を継承発展させる一方、『東洋学報』・『東洋文庫欧文紀要』等の学術誌の編集、資料収集・整理、および研究データベースの開発・発信等において、研究支援者として雇用して実務経験を積ませるなど、若手研究者の育成および雇用促進のための体

制を一層充実させ、東洋文庫の事業の安定的・継続的な実施をはかる。

〈若手研究者の雇用と任期中および任期満了後の支援〉

奨励研究員等若手研究者のためのポストとして「嘱託研究員」を設定し、各部署の諸事業に参画しつつ、かつ東洋文庫の所蔵資料を活用して研究を行うことを支援している。2019年度には新たに「嘱託研究員規約」を施行し、嘱託研究員は所属長の許可を得た上で、本来の業務に影響を生じない範囲内で、個人または文庫の研究班・研究グループの調査研究活動等、研究者としてのキャリアアップのために必要な諸活動を行うことができ、かつ文庫から科研費に申請する資格を与え(ただし文庫等での勤務時間外にみずから主体的な研究を行うだけの十分なエフォートを確保できる場合に限る)、嘱託研究員の任期満了後も東洋文庫の専任研究員として在籍し、文庫の諸施設を利用可能とすること等を定めた。

上記の東洋文庫における若手研究者育成事業についてホームページ上で広く周知する準備を進めた。

〔研究実施概要〕

内外の若手研究者が国際的に活躍できるスキルを身につけることを支援するため、4月3日、外国人講師ポール・クラトスカ氏(シンガポール国立大学出版会編集長)を講師に迎え、「英文による成果発信支援セミナー」を開催し、若手研究者3名(内部1名、外部2名)の参加を得た。

総合アジア圏域研究では、若手研究者育成の一環として、3月11日に京都大学文学研究科図書館で行った『大明省図』(今西春秋旧蔵、書写年不明)の閲覧・調査に当たり、奨励研究員の多々良圭介氏を派遣して、東洋文庫所蔵の『大明地理之図』(細谷良夫研究員寄贈、文化11年(1814)に模写されたもの)と比較検討させることで、近世日本における東アジア認識について理解するための機会とした。

現代中国研究では、助教・講師クラスの若手研究者との共同論文の作成を通じて、彼らの調査・研究意欲を高めるべく支援した。国際関係・文化グループでは、華東師範大学との協同で、1950～80年代中国を対象とする「中国当代史研究ワークショップ」を上海で共催し、公募研究によって若手研究者に対して報告と交流の場を提供した。戦後日本人による中国旅行記(1950～80年代)について、若手研究者を指導しながら目録・解題の作成を進めた。奨励研究員の関智英氏は、日本学術振興会特別研究員 PD の採用期間中(2015～17年度)より『東洋文庫蔵汪精衛政権駐日大使館文書目録』(2016年3月)、『「順天時報」社論・論説目録』(村田雄二郎監修、2017年3月。いずれも東洋文庫刊行)の編纂に参加し、2018年度に奨励研究員に任用されて以降も、近代日中関係史の専門家として、国際関係・文化グループの研究会に参加するなど研究班の活動を通して育成を続けてきたが、2020年4月より津田塾大学准教授して着任することが決まった。

現代イスラーム研究では、中東・中央アジアの歴史的法令の翻訳作業において、若手研究者が研究協力者として参加し、中心的な役割を果たすとともに、12月14日開催の国際シンポジウム“Structural Changes in the Modern Middle East: Revolution, Constitution, Parliament”でも報告者として参加した。

東アジア研究のうち**前近代中国研究班**「中国古代地域史研究」グループの研究会では、若手研究者が参加者の過半を占める。研究員のほか、外国人研究者も加わる形で共同作業として読解、研究を進めることで、若手研究者の研究遂行能力の向上に取り組んだ(【東ア-1】)。現地資料調査およびデータベース作成に当たっては、専修大学大学院博士課程の韓国人留学生および修士課程の大学院生が研究協力者として参加した(【東ア-2】)。「中国社会経済・基層社会用語のデータベース化」グループの研究会の参加者は、時代別、主題別の分野に関する老練な専門研究者と、修士課程・博士課程・PD から現任の大学教員にわたる若手研究者とが相半ばし、若手研究者には研究報告を求めている。2019年度は、宮内勇弥氏(東京大学大学院修士課程)が「漢魏両晋における異民族への官爵授与」(6月14日)、酒井駿多氏(上智大学大学院博士課程)が「古代中世における異民族と動物説話」(7月12日)について報告を行い、班員と議論を重ねた。また、大川裕子氏(日本女子大学非常勤講師)は月例研究会で清代の農書『沈氏農書』・『補農書』訳注について継続的に報告し、『上智史学』に順次その成果を公表してきたが、2020年4月より上智大学准教授として着任することが決まった(【東ア-3】)。近年、首都圏の大学院で中国近世史を専門とする研究者が陸続として定年退職し、同じ

地域や時代を専門とする者が必ずしもそのポストを継承できない日本の教育機関の現状においては、この分野の若手研究者の育成が危機に瀕しているといっても過言ではない。そのような状況にあって、2018年度刊行の『中国近世法制史料読解ハンドブック』は、指導者から直接指導を受けられない若手研究者に対し、東洋文庫研究員がこれまで培ってきた研究資源を開放し、この状況を改善する上で非常に意義深いものである。その全文を東洋文庫リポジトリ「ERNEST」で公開することで、紙媒体で発行する以上の発信力を持って、全国の若手研究者を裨益するものとなっている (https://toyobunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1243)。6～7月に開催した前期東洋学講座「中国法制史料読解入門」は、まさに上記の刊行目的とその意義を外部に伝えるものとなった。その他、新たな研究啓蒙書の作成や、若手研究者に開かれた研究報告会を開催してインターカレッジ的な指導を可能にするための方策を模索した（【東ア-4】）。

東北アジア研究班では、奨励研究員の多々良圭介氏とともに、東洋文庫所蔵の清代文書資料ならびに他研究機関所蔵の文書資料における「紙質」に係わる研究、および中国海関の医学報告 (medical reports) 所載の記事をデータベース化する作業等に従事することにより、若手研究者が当該文書に関するさまざまな知識と研究方法を習得できるよう努めた（【東ア-7】）。若手研究者育成の一環として、清代史研究のための満洲語講座を継続して実施した（【東ア-8】）。

内陸アジア研究のうち**中央アジア研究班**の近現代中央ユーラシア定期刊行物研究会のメンバーは若手研究者が中心であり、今後とも参加を呼びかけていく（【内陸-2】）。2019年度に刊行した『濱田徳海旧蔵敦煌文書コレクション目録』の目録部分の整理に当たり、若手研究者の速水大氏が中心的な役割を果たした（【内陸-3】）。**チベット研究班**では、チベットの歴史、言語、宗教（仏教・ボン教）、社会に関する一次資料の基礎研究に当たり、若手研究者を指導しながら共同研究を行った。また若手研究者の宮崎展昌氏を客員研究員として新規採用した（2019年7月の採用当時一般財団法人人文情報学研究所研究員、10月に鶴見大学仏教文化研究所准教授に着任）（【内陸-4】）。

インド・東南アジア研究のうち**インド研究班**では、1月25日開催の研究会に外部から若手研究者の参加を受け入れた（【南ア】）。**東南アジア研究班**では、若手研究者の研究会への参加を積極的に促すとともに、彼らの研究構想を発表する場を設け、その成果の一端を *TBRL21, A History of the Social Integration of Visitors, Migrants, and Colonizers In Southeast Asia: Role of Local Collaborators* に寄稿してもらった。故仲田浩三氏旧蔵の古ジャワ語刻文拓本資料について、若手研究者がその目録化作業に取り組んだ。班所属の若手研究者山口元樹氏が2020年5月より京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻准教授として着任することが決まった（【東南】）。

西アジア研究では、国内の文書研究プロジェクト(京都外国語大、東京外国語大アジア・アフリカ言語文化研究所など)と連携し、文書資料講読セミナーや研究ツールの提供(文書館案内、史料解題など)を進め、若手研究者の育成に寄与した（【西ア】）。

なお、2019年度は、若手研究者育成の一環として下記の者を採用した。

〈嘱託研究員〉

・太田 啓子

研究課題「アラビア半島・紅海文化圏の歴史」に取り組みつつ、総合アジア圏域研究班に所属し、東洋文庫諸活動の継承・発展のため国際シンポジウム等を通じた国際交流事業に従事した。

・小澤 一郎

研究課題「近現代西アジア軍事社会史」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため欧文刊行物の編集・校閲に従事した。

・中村 威也

研究課題「中国古代地域社会、非漢族研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため和文刊行物の編集・校閲に従事し、かつその豊富な学術刊行物編集経験を東洋文庫の内外に対して普及すべく取り組んだ。

〈奨励研究員〉

・中塚 亮

研究課題「明代小説『封神演義』の研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため図書事業に参画した。

・多々良圭介

研究課題「清代文書資料を中心とした諸文献の紙質をめぐる研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに紙質調査に参画した。

以上は、特定奨励費の活動に参画した者。科学研究費の活動に参画した者は下記の通り。

・関 智英

科学研究費基盤研究（C）「近代日中関係の対外宣伝と相互理解をめぐる摩擦と模索—『順天時報』の分析を通して」（研究代表者：青山治世亜細亜大学准教授）の研究分担者として参画した。

アジア基礎資料研究のための6部門13研究班20テーマ

部門	研究班	アジア基礎資料研究テーマ	略号	
超域アジア	総合アジア	アジア資料学の深化—保存・研究・普及のための文理融合型 アジア資料学の展開と研究データベースの構築	—	
	現代中国	現代中国の総合的研究(4)	—	
	現代イスラーム	近現代イスラーム地域の構造変動	—	
歴史 文化 研究	東アジア	前近代中国	中国古代地域史研究	東ア-1
			東アジアの古代・中世遺跡出土の遺構・遺物の考古学的研究	東ア-2
			中国社会経済・基層社会用語のデータベース化	東ア-3
			宋以後の法令分析を通じた中国前近代社会の構造解明	東ア-4
	近代中国	20世紀前半日本の中国調査研究機関に関する総合的研究	東ア-5	
	東北アジア	近世の朝鮮で作製された各種記録類についての基礎的・総合的 研究	清代満洲語文書資料及び画像資料等のデータベース化に関する 研究	東ア-7
			清代中国諸地域の構造分析:政治・社会経済・民族文化の史的 展開	東ア-8
			日本	岩崎文庫貴重書の書誌的研究(4)
	内陸アジア	中央アジア	非漢字諸語出土古文献の研究	内陸-1
			近現代中央ユーラシアにおける出版メディアと政治・社会運動	内陸-2
			日本所在の敦煌・吐魯番文書の整理と研究	内陸-3
		チベット	チベット語資料の活用とチベット文化の複合的研究	内陸-4
	インド・ 東南アジ ア	インド	インド中世・近世における文書史料研究	南ア
東南アジア		近世東南アジアをめぐる旅行記史料の研究	東南	
西アジア	西アジア	文書資料による比較制度研究	西ア	
資料	東アジア資料	東アジア現地資料の研究	—	



II. 資料収集・整理

アジア基礎資料研究に取り組む各研究班と協力して、アジアの現状および歴史・文化に関する一次資料(写本、文書史料、刊本、地図、統計、調査記録等)、専門研究書、定期刊行物を収集し、東洋文庫所蔵資料の充実に努めた。

収集した資料を速やかに整理して電子情報化することで、アジア学資料センターとしての機能強化を推進した。東洋文庫所蔵資料の書誌に関するデータベース化をさらに推進し、オンライン検索サービスにより広く一般の利用に供するため、様々な言語に通じた司書・研究者・大学院生による書誌データの加工作業を継続した。

2015～2018 年度に続き、東洋文庫の所蔵資料のうち、和書・漢籍・洋書古典・近代初期洋書、絵画、考古資料等に対する悉皆調査を行い、専門家による和漢洋古典籍の保存修復を実施するとともに、書誌学・資料学の専門家の協力のもと調査・分析ならびに記録を行い、デジタル・アーカイブに加工し、広範な利用の目的にもかなうようにすべく取り組んだ。

以上の活動を推進するため、書誌学に通曉した人材の育成と、アジア資料学の構築を目指し、東洋文庫独自の若手人材育成という課題に取り組んだ。

A. 資料購入

超域アジア研究、アジア諸地域研究、資料研究において必要とされる一次資料を中心に購入を進めた。購入冊数は下記の通りである。

区 分	和漢書	洋 書	その他
総合アジア圏域研究	34 冊	21 冊	0 件
超域・現代中国研究	162 冊	6 冊	3 件
超域・現代イスラーム研究	0 冊	407 冊	0 件
東アジア研究	144 冊	2 冊	0 件
内陸アジア研究	13 冊	38 冊	0 件
インド・東南アジア研究	3 冊	5 冊	0 件
西アジア研究	0 冊	315 冊	0 件
共通(継続・大型資料)	793 冊	120 冊	0 件
合 計	1,149 冊	914 冊	3 件

B. 資料交換

国内外各提携機関との間で資料交換を進めた。

区 分	受 贈					寄 贈		
	和漢書	洋 書	アジア諸語	その他	計	和漢書	洋 書	計
単行本	387 冊	65 冊	340 冊	0 冊	792 冊	250 冊	610 冊	860 冊
定期刊行物	809 冊	124 冊	25 冊	7 件	958 冊 7 件	4,395 冊	540 冊	4,935 冊
計	1,196 冊	189 冊	365 冊	7 件	1,750 冊 7 件	4,645 冊	1,150 冊	5,795 冊

C. 資料保存整理

2019年4月1日～2020年3月31日までの期間における保存整理作業は、下記の通りである。

保存整理作業として、保存環境の整備、虫菌害の対策に努めるとともに、破損資料の修理・修復、洋書革装本の保全処置、保存容器の作製などを行った。本年度は昨年度に引き続き、ミュージアムでの展示資料を初めとする和・漢・洋古典籍(モリソン文庫・岩崎文庫ほか)を中心に作業を行った。また、若手人材育成プロジェクトの一環として、昨年度に引き続き、保存修復の専門家による資料取り扱い講習会を開催した。

・逐次刊行物合冊製本(外注)	212 点
・修理・修復(破損による再製本を含む)	
洋書	383 点
和漢書	259 点
・簡易補修	38 点
・革装本の保全処置(HPC塗布など)	136 点
・保存容器(外注含む)	358 点
・状態点検・調査のみ(処置なし)	388 点
・マイクロフィルム劣化防止作業	254 件



2019年7月に実施した資料取扱講習の様子

Ⅲ. 資料研究成果発信

A. 定期出版物刊行

1. 『東洋文庫和文紀要』(東洋学報) 第101巻第1-4号 A5判 4冊(刊行済)
▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1320
※第4号は、東洋文庫リポジトリ「ERNEST」公開準備中
2. 『東洋文庫欧文紀要』 No.77 B5判 1冊(刊行済)
(*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*)
▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1344
※東洋文庫リポジトリ「ERNEST」公開準備中
3. 『近代中国研究彙報』 第42号 A5判 1冊(刊行済)
▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1342
※東洋文庫リポジトリ「ERNEST」公開準備中
4. 『東洋文庫書報』 第51号 A5判 1冊(刊行済)
▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1343
※東洋文庫リポジトリ「ERNEST」公開準備中
5. *Modern Asian Studies Review* Vol.11 オンラインジャーナル(公開)
／新たなアジア研究に向けて
▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1334
6. *Asian Research Trends New Series* No.14 A5判 1冊(刊行済)
▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1338
※東洋文庫リポジトリ「ERNEST」公開準備中

B. 論叢等出版

1. 『濱田徳海旧蔵敦煌文書コレクション目録』 B5判 1冊(刊行済)
▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1339
※東洋文庫リポジトリ「ERNEST」公開準備中
2. *A History of the Social Integration of Visitors, Migrants and Colonizers in Southeast Asia: Role of Local Collaborators* (TBRL21) B5判 1冊(刊行済)
▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1340
※東洋文庫リポジトリ「ERNEST」公開準備中
3. *The Vellum Contract Documents in Morocco in the Sixteenth to Nineteenth Centuries: Part II* (TBRL22) B5判 1冊(刊行済)
▶ https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1341
※東洋文庫リポジトリ「ERNEST」公開準備中
4. 2019年度総合アジア圏域研究国際シンポジウム要旨集 A4判 1冊(刊行済)

IV. 普及活動

アジア基礎資料研究の成果を一般向けに分かりやすく解説するため、東洋文庫研究員等による東洋学講座を前後2期、計6回開催した。また、各研究班のコーディネートによって、招聘研究者および来日中の著名な外国人研究者による特別講演会を開催した。その一方、学芸員を雇用して、東洋文庫の蔵書資料や研究成果をわかりやすく展示解説し、一般に広く普及すべく取り組んだ。

A. 研究情報普及

1. 東洋学講座

近年の研究成果を一般に向けて広く普及するため、前期に前近代中国研究班「宋以後の法令分析を通じた中国前近代社会の構造解明」グループ、後期に前近代中国研究班「中国古代地域史研究」グループによる講座を実施した。

(前期) 中国法制史料読解入門

第572回6月10日(月)

「中国歴史公文書読解入門—『中国近世法制史料読解ハンドブック』出版に寄せて—

東洋文庫研究員 山本 英史氏

第573回6月19日(水)

「清代における家族生活と契約」

東洋文庫研究員 岸本 美緒氏

第574回7月5日(金)

「中華民国北洋政府期法院訴訟記録について」

東洋文庫研究員 西 英昭氏

(後期) 木簡・竹簡資料への誘い(いざない)

第575回11月6日(水)

「中国戦国時代の「非発掘簡」」

東洋文庫研究員 小寺 敦氏

第576回11月13日(水)

「秦漢時代の法律文書」

東洋文庫研究員 太田 幸男氏

第577回11月20日(水)

「漢簡が伝える中国古代の裁判」

東洋文庫研究員 池田 雄一氏

2. 東洋文庫公開講座・公開研究会

東洋文庫の所蔵資料や研究活動・研究成果をテーマとして、国内外の当該分野の著名研究者を招いて実施した(以下、開催日順で記載)。

(現代中国研究班「国際関係・文化グループ」による公開研究会)

4月6日(土)

「東洋文庫超域アジア部門現代中国研究班国際関係・文化グループ 2019年度第1回研究会」

「書評—小野泰教『清末中国の士大夫像の形成』(東京大学出版会、2018年)」

報告者：東京女子大学教授 茂木 敏夫氏

応答：学習院大学准教授 小野 泰教氏

(久保亨研究員が受け入れた外来研究員による講演会)

9月18日(水)

「中国共産党の初期抗日統一戦線論について：章乃器の議論との関係から」

広島大学大学院教授 水羽 信男氏

(協力協定機関フランス国立極東学院との共催による国際ワークショップ)

10月27日(日)

「国際ワークショップ「外語の熟達から世界統制へ」

開会の挨拶：東洋文庫研究員 平野健一郎氏

「『羅葡日辞書』の翻訳と日本イエズス会教育」

大阪大学大学院文学研究科准教授 岸本 恵実氏

「日本イエズス会衰亡史と『日葡辞書』の編纂」

フランス国立極東学院教授 クリストフ・マルケ氏

「ロシア使節レザーノフが編纂した露日辞典」 ノンフィクション作家 大島 幹雄氏

総合討論：東洋文庫研究員 牧野 元紀氏

「中羅(伊)辞書の草稿に関する一考察(17~18世紀を中心に)」

フランス国立極東学院教授 ミケーラ・ブソツァティ氏

「「花咲く中華文明の影に」—スペイン宣教師による中国語辞書の草稿を考える(17~18世紀を中心に)」

マドリード大学異文化・混血・マドリードグローバル化研究所専任研究員

マリア・テレサ・ゴンザレス=リナーヘ氏

「英粵辞典・語彙集の歴史—文献学から見た19世紀標準広東語の構築」

東京大学大学院総合文化研究科教授 吉川 雅之氏

「フランスにおける満州語の研究(1789-1810)—「補助言語」の辞書編纂法と文法の研究」

中央研究院助研究員 モルテン・セデルブロム=サーレラ氏

総合討論：クリストフ・マルケ氏

閉会の挨拶：クリストフ・マルケ氏

(現代イスラーム研究班のコーディネートによる総合アジア圏域研究国際シンポジウム)

12月14日(土)

The Eighth International Symposium of Inter-Asia Research Networks

Structural Changes in the Modern Middle East: Revolution, Constitution, Parliament

Organizer:

KASUYA Gen (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Nihon University)

Chair:

YUASA Takeshi (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Sophia University)

Opening Address

MIURA Toru (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Ochanomizu University)

Opening Remark

KASUYA Gen Introduction

Session 1: Islam and Search for Democratization

Fuat DÜNDAR (Associate Professor, TOBB-ETU University)

“Ottoman Parliamentary System and Minorities: Democratizing Conflicts?”

TOKUNAGA Yoshiaki (Ph.D. Student, The University of Tokyo)

“The Discussions on Suffrage in Iran during the Qajar-Pahlavi Transition Period: The Establishment of the Article 1 of Act of Tir 22, 1306 (1927)”

YOSHIMURA Shintaro (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Hiroshima University)

“Comment and Discussion”

Session 2: Islam and Politics

Yakoob AHMED (Lecturer, Istanbul University)

“İlmiyye ve Siyaset, Challenges between Islam and Politics in the Discourse of the Ottoman Ulema”

SATO Tomonori (Ph.D. Student, The University of Tokyo)

“Nation-State, Freedom and Religion in Discussions of the 1923 Constitutional Committee: Reconsidering the Relationship between Religion and Politics in the Constitutional Kingdom of Egypt”

IKEDA Misako (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Nagoya University of Commerce and Business)

“Comment and Discussion”

Session 3: Justice and Society

TAKAIWA Nobutada (Lecturer, Hitotsubashi University)

“Changes of the Judicial System and the Law in the Modern Egypt: Through the Codification Process of the Waqf Law”

Qolamreza NASSR (Postdoctoral Researcher, Hiroshima University)

“Middle Class: The Weak Socio-Political Actor in Post-Revolution Iran”

SUZUKI Hitoshi (Research Fellow, Toyo Bunko; Senior Researcher, IDE-JETRO)

“Comment and Discussion”

General Discussion

(協力協定機関ハーバード・エンチン研究所との共催による国際シンポジウム)

1月18日(土)・19日(日)

The International Symposium, jointly sponsored by the Harvard-Yenching Institute and Toyo Bunko

Books as Texts and as Objects: The Production, Circulation, and Collection of Knowledge in Asia and Europe

Organizer:

Linda GROVE (Senior Consultant for Harvard Yenching, resident in Tokyo)

HAMASHITA Takeshi (Research Department Head, Toyo Bunko)

January 18, 2020 (Sat.)

Keynote Speech

Ann BLAIR (Carl H. Pforzheimer University Professor, Harvard University)

“Maxims of Book History from the Study of Early Modern Europe”

First session: Materiality of Books and Book Production

Chair: Linda GROVE

OKI Yasushi (Professor, East Asian Literature at Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo)

“Spread of the Stitched Book Binding and its Background in China”
 HSIUNG Hansun (Assistant Professor, Durham University)

“Squiggles: Media, Forgetting, and the Illegibility of the Past”
 XU Xiaojie (Research Fellow, Toyo Bunko)

“The Scientific Analysis of Paper in Toyo Bunko Collection: Exploring a New Research Methods for Oriental studies”
 AGATA Mari (Professor, Keio University)

“The Look of the Bible: A Cluster Analysis of the Printed Bibles Based on their Physical Features”
 “Comment and Discussion”

Second Session: Transmission of Ideas through the Circulation of books (including East-West transmission and transmission within Asia)

Chair: Ann BLAIR

NAM Nguyen (Fulbright University Vietnam)

“Beyond Phrenological and Physiological Stories of Sexual Intercourse: Textual Reproductions within and across National Borders through the Case of Creative and Sexual Science in East Asia”

NII Yoko (Postdoctoral JSPS Research Fellow)

“Chinese History books in European Historiography”

Devin FITZGERALD (Curator of Rare Books and History of Printing, UCLA Library Special Collections)

“Reading the Collected Institutions of the Ming in Early Modern Europe”
 “Comment and Discussion”

Third Session: Archives, Creation of Collections and Libraries

Chair: ASAMI Masakazu (Professor, Keio University)

Peter KORNICKI (Emeritus Professor of Japanese Studies, Cambridge University)

“The Perry Expedition and Japanese Books in America”

SASAKI Takahiro (Chair, The Keio Institute of Oriental Classics)

“Books Across Borders: Doing Research at the Shidō Bunko”

SHIROYAMA Tomoko (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Graduate School of Economics, The University of Tokyo)

“East Asia in Transition: Views from the George Morrison Pamphlet Collection”
 “Comment and Discussion”

Special lecture

SHIBA Yoshinobu (Executive Librarian, Toyo Bunko)

“Why an Archival Center was necessary for the Study of Oriental History in Japan?”

Roundtable discussion with Speakers

Chair person: HAMASHITA Takeshi

(総合アジア圏域研究班「地図研究グループ」による研究報告会)

2月12日 (水)

「山国郷の『大明地理之図』とその周辺」

天理大学国際学部教授 藤田 明良氏

3. 特別講演会

東洋文庫研究員、研究班の主権によって、主として来日中の著名な外国人研究者を招いて実施した (以下、開催日順で記載)。

(若手研究者育成のためのセミナー)

4月3日(水)

「英文による成果発信支援セミナー」〔英語・通訳なし〕

国立シンガポール大学出版会編集長 Paul H. Kratoska 氏

(現代中国研究班「国際関係・文化グループ」による公開研究会での講演会)

4月6日(土)

「東洋文庫超域アジア部門現代中国研究班国際関係・文化グループ 2019年度第1回研究会」

「法政大学—権利的概念和話語」〔中国語・通訳なし〕

報告者: University of California, Santa Barbara, Associate Professor 鄭 小威氏

コメント: 東洋文庫研究員 村田雄二郎氏

(斯波義信研究員のコーディネート、2018年度の外国人客員研究員による講演会)

6月30日(日)

「重野安繹と初期の静嘉堂—岩崎弥之助の見識に触れて」〔日本語〕

関西大学文学部教授 陶 徳民氏

(現代中国研究班「政治・外交グループ」による講演会)

9月9日(月)

「1972年米中首脳会談から見る米中関係における日本問題の原点」〔中国語・通訳あり〕

北京大学教授 牛 大勇氏

(濱下武志研究員のコーディネートによる講演会)

10月21日(月)

講演会「中国海関史研究」〔中国語・逐語通訳なし〕

「中国海関総務課税務司与総税務司岸本広吉(1937-45)」

上海交通大学教授 張 志雲氏

「晚清海関年度貿易報表計算方式解析: 以粵海関為例 (1860-1911)」

中山大学特聘研究員 侯 彦伯氏

(中央アジア研究班「非漢字諸語出土古文献の研究」グループによる講演会)

11月10日(日)

“Serindia and Turfan: Notes on editing and cataloguing Old Uyghur texts of the Serindia Collection in Sankt Peterburg”〔英語・通訳なし〕

東洋文庫研究員 Peter Zieme 氏

(現代イスラーム研究班と東京大学東洋文化研究所の共催による講演会)

12月12日(木)

“A Historical Reading of the Ottoman-Turkish Open-Door Policy Towards Im-migrants and Refugees”〔英語・通訳なし〕

TOBB University of Economics and Technology, Turkey Fuat Dündar氏

(総合アジア圏域研究班「地図研究グループ」による研究報告会)

2月12日(水)

「利瑪竇世界地図研究 (マテオリッチ世界地図研究)」〔中国語・通訳なし〕

寧波大学人文学院教授 龔 纓晏氏

4. 東洋文庫談話会（東洋文庫研究会）

専門分野の若手研究者による成果報告会として設定している。2019年度は3月の開催を検討していたが、新型コロナウイルスの感染防止のため、開催を延期した。

5. ミュージアムによる公開講座・イベント・ワークショップ

東洋学の一般への普及を目的に、企画展に合わせて、以下のミュージアムによる公開講座・イベント・ワークショップを開催した（以下、項目別に開催日順で記載）。

【公開講座】

（「インドの叡智展」 会期：2019年1月30日～5月19日）

4月7日（日）

「ガンディー、平和を紡ぐ人」

立教大学教授 竹中 千春氏

4月28日（日）

「インド思想研究と東洋文庫」

筑波大学名誉教授

東洋文庫研究員 川崎 信定氏

以上

（「漢字展—4000年の旅」 会期：2019年5月29日～9月23日）

6月23日（日）

「漢籍と文庫—東洋文庫を中心として—」

慶應義塾大学教授 高橋 智氏

7月21日（日）

「『大漢和』の時代—昭和の大出版は如何にして成ったか」

元大修館書店編集部 池澤 正晃氏

以上

（「東洋文庫の北斎展」 会期：2019年10月3日～2020年1月13日）

11月4日（月・祝日）

「葛飾北斎とその時代」

北斎館館長 安村 敏信氏

11月10日（日）

「HOKUSA Iに魅せられたフランス—明治時代、パリに渡った作品を中心に—」

フランス国立極東学院院長 クリストフ・マルケ氏

11月17日（日）

「北斎の東海道物について」

大和文華館館長

あべのハルカス美術館館長

東洋文庫研究員 浅野 秀剛氏

12月1日（日）

「狂歌人たちの遊び—華麗な私家版の世界—」

法政大学教授 小林ふみ子氏

以上

【ワークショップ】

（「インドの叡智展」 会期：2019年1月30日～5月19日）

5月12日（日）

「遊んで学ぼうインドの叡智展—ミュージアム探検とワークショップ」

日本大学教授 伊豆原月絵氏
日本大学ミュージアム・アソシエイツ

（「漢字展—4000年の旅」 会期：2019年5月29日～9月23日）

8月4日（日）

「論語から生まれた、大人も読めない書けない四字熟語ワークショップ」

東京大学教授 小島 毅氏
論語教育普及機構主催

（「東洋文庫の北斎展」 会期：2019年10月3日～2020年1月13日。「修復のお仕事展」とのコラボレーションによるワークショップ）

11月30日（土）

「東洋文庫×修復のお仕事展『変り屏風を作ろう！』」

伝世舎 三浦功美子氏

12月8日（日）

「東洋文庫×修復のお仕事展『フレームで絵葉書を飾ろう！』」

修復師 鈴木 香里氏
以上

（「大清帝国展」 会期：2020年1月25日～5月17日）

2月23日（日）

「自分にぴったりの薬膳茶をつくろう！」

漢方薬剤師 末次 真緒氏
以上

【イベント】

（「インドの叡智展」 会期：2019年1月30日～5月19日）

5月3日（金）～5月5日（日）

「インディアン・ビアガーデン：インド舞踊の特別ステージ」

インド舞踊家 野火 杏子氏
インド舞踊家 安延佳珠子氏
以上

6. 研究情報の普及

研究情報を普及するため、機関リポジトリ「ERNEST」(<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/>)。利用統計は「I アジア基礎資料研究」pp.12～13に既出)、TBOPACシステム (<http://tbo-pac.toyo-bunko.or.jp/>)。利用統計は次頁を参照) を管理・運営した。

2019年度TB OPAC利用統計

年月	訪問者数	1日平均	検査数	1日平均
2019年4月	530	18	38,887	1,297
5月	544	18	30,748	992
6月	583	20	25,768	859
7月	1,029	34	47,030	1,518
8月	1,025	34	40,275	1,300
9月	1,058	36	41,517	1,384
10月	1,080	35	54,168	1,806
11月	1,047	35	39,639	1,322
12月	1,097	36	43,900	1,464
2020年1月	1,097	35	27,373	913
2月	984	32	29,452	1,016
3月	1,074	35	28,189	973
合計	11,148	368	446,946	14,844

※30分以内に同一IPから訪問があった場合は1名としてカウントされる。

7. 参考情報提供

調査研究による研究成果をはじめ東洋文庫の活動全般に関する年次報告書として、下記の刊行を行った。

『東洋文庫年報』2018年度版

A5判 1冊（刊行済）

https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=1335

B. データベース公開

東洋文庫所蔵資料の書誌に関するデータベース化は、総冊数約100万冊の遡及入力を進めており、2019年度は、引き続き和書分類データベースなどの書誌データの補充のほか、貴重洋書の全頁資料、絵画、地図などの画像データのデジタル化を進めると同時に、梅原考古資料の未公開部分（縄文時代・弥生時代）につきデジタル化・データベース化を推進することで、本格的な東洋学多言語貴重資料のマルチメディア電子図書館の構築に取り組んだ。

従来より整備・公開している書誌・画像・動画データベースについては、もっぱら公共へのサービスに重点を置き、アクセス数の掌握・分析を行ってきたが、今後は、実際にどの程度、研究者に利用されているかを掌握するため、下記の体制を構築した。

一. データの一部について登録制を導入した。

従来、不特定多数への公開に問題があって一般公開に至っていないデータがあり、これについて、登録制を導入してサンプルデータをウェブサイト上で公開する作業を進めた。登録者には、利用した著作物について、その著作物の書誌事項・利用個所の報告を義務付け、その利用状況を把握するべく取り組んだ。なお、データ全篇の利用を希望する者は、東洋文庫閲覧室の専用端末で利用することとした。2019年度は、東アジア資料研究班と共同して、下記の公開を行った。

(1) 中国地方劇DVDのデジタルデータ（中国語字幕付き）：本編648件、サンプル動画313件

中国地方劇DVDについては、田仲一成研究員が香港および中国大陸で収集したもので、登録者にはウェブサイト上でサンプル動画（30秒）の視聴を可能とし、動画の本編は東洋文庫閲覧室の専用端末で利用することとした。

(2) 梅原考古資料日本縄文時代之部・日本弥生時代之部 分類データベース：5200件

梅原考古資料朝鮮之部については、従来より簡易分類を付したモノクロ画像のデータベースを公開しているが、利用頻度の高い日本の縄文時代および弥生時代の文物について、出土地域や遺物の形態、所蔵機関等を詳細に分類し、カラーの高精細画像を公開した(2,744件)。今後はさらに、銅鐸之部について公開作業を進める。

二. 利用者に対し、データベースのコンテンツを著作物に引用した場合に、その旨を著作物に明記すること、本文庫に対するその旨の通知及び当該著作物の1部献呈などを要望した。この旨を明記した文言を、データベースの大項目の冒頭に掲げた。また引用個所が明示できるよう、表示した頁に記号・番号を付与すべく取り組んだ。

上記の体制を構築するため、データベース技術指導者・補助作業者を雇用して作業を進めた。

2019年4月1日～2020年3月31日までの期間における、東洋文庫の図書・資料のデータ(日本語・英語)に対するオンライン検索アクセス状況については、別添資料「公益財団法人東洋文庫データベース利用状況調査」の通りである。

C. 海外交流

フランス国立極東学院および中央研究院の歴史語言研究所・近代史研究所(台湾)、ハーバード・エンチン研究所(アメリカ)、アレキサンドリア図書館(エジプト)、イラン議会図書館、SOAS(イギリス)、ベトナム社会科学院漢喃研究所、マックス・プランク研究所(ドイツ)、国際テュルク・アカデミー(カザフスタン)、吉林師範大学満学研究院(中国)との学術交流を進め、資料・情報の交換と研究者の相互訪問を継続的に実施した。

なかでもハーバード大学アジア研究図書資料館であるハーバード・エンチン研究所とは、2010年10月に交流協定を結び、資料交流・人材交流のみに止まらず、共同研究ならびにそれらを通じた若手人材育成を共同で行う取り組みを開始しており、それらを一層推進した。2019年度は、2020年1月18・19日に国際シンポジウム“Books as Texts and as Objects: The Production, Circulation, and Collection of Knowledge in Asia and Europe”を共催した。

世界各地からアジア基礎資料研究に取り組む外国人研究者を招聘して、総合アジア圏域研究国際シンポジウム“Structural Changes in the Modern Middle East: Revolution, Constitution, Parliament”(2019年12月14日開催)等を通じた国際学術交流を推進した。その窓口には若手研究者を携わらせることで、最新の研究動向の把握や国際的な人脈形成等を支援し、国際的に活躍可能な人材の育成に取り組んだ。

V. 学術情報提供

東洋文庫は、日本における東洋学にかかわる共同利用の研究機関であると同時に、国内外の研究者並びに研究機関との連絡に当たって今日に至っている。従って、学術情報の提供に関する下記の諸事業は東洋文庫として最も力を入れているところである。

A. 図書・資料の閲覧(協力)サービス

広く一般に開放された無料の閲覧室の運営を行った。

数量/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
書庫利用者人数	32人	40人	44人	46人	35人	22人
閲覧者人数	174人	223人	177人	252人	281人	185人
閲覧図書数	3,077冊	2,666冊	2,623冊	1,825冊	3,284冊	2,014冊
レファレンス数	56件	71件	60件	80件	85件	56件

10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
54人	22人	36人	19人	24人	2人	376人
166人	188人	135人	135人	145人	4人	2,065人
2,226冊	1,997冊	1,254冊	2,610冊	2,694冊	41冊	26,311冊
59件	57件	46件	42件	46件	2件	660件

B. 研究資料複写サービス

	申し込み件数	焼付枚数
マイクロフィルム・紙焼写真	101件	
電子複写	694件	23,059件

C. 情報提供サービス

刊行物の全文データ公開を随時更新した。

D. 展示

広く一般多数の方々を対象とした東洋学の普及を図る手段として、「東洋文庫ミュージアム」を運営した。

1. 基本方針

このミュージアムでは、特に東洋学に興味を持たない一般の方々を主な対象とし(中学生程度の歴史知識を前提)、これらの利用者には、ミュージアム見学を通して東洋学に興味を持つ機会を提供するものである。本ミュージアムは、東洋文庫の蔵書・史料を中心に種々の展示企画を組み立て、常に新たな発見と変化のある展示を心がけている。

2. 展示手法

広く一般の方々にミュージアム訪問の興味を喚起するため、①見学に適切な規模の展示内容とし、②展示の解説は日頃東洋学とは疎遠な利用者にも十分理解できる簡易なものとし、③デジタル技術等を取り入れた視聴覚的かつ斬新な展示で利用者の興味を引くことに努めた。

3. 施設

温度・湿度管理、窒素ガス消火設備運用により、展示図書・資料の保全に万全を期している。また、併設のギフト・ショップ、ミュージアム・カフェでは、東洋文庫の所蔵資料も紹介し、一般利用者に対してミュージアムの魅力を高め、東洋学普及の一翼を担う、ミュージアムの一体施設として運営した。

4. 展示スケジュール

常設展と企画展の組み合わせからなる展示スケジュールを立て、以下の展示を開催した。

- a) 常設展では国宝、重文などの指定品のほか、東洋文庫が所蔵する名品を、年3回内容を変更して公開した。
- b) 以下の展示を開催し、展示図録を発行した。
〈企画展〉
 - ①「インドの叡智展」(会期:2019年1月30日～5月19日)
 - ②「漢字展—4000年の旅」(会期:2019年5月29日～9月23日)
 - ③「東洋文庫の北斎展」(会期:2019年10月3日～2020年1月13日)
 - ④「大清帝国展」(会期:2020年1月25日～2020年5月17日)〈名品展〉

「記録された記憶～東洋文庫の書物からひもとく世界の歴史」
- c) 各企画展において展示図録を作成した。全ページカラーで画像を多用し、解説文も平易なものわかりやすいものに仕上げた。A5版でハンディなブックレットタイプである。
- d) 上記企画展会期中に公開講座(企画展示記念講座)を開催した。
IV.普及活動—A. 研究情報普及—5. ミュージアムによる公開講座・イベント・ワークショップを参照。
- e) 六義園特別展示「六義園をめぐる歴史」を開催した。
会期: ①3月20日～4月8日
②11月20日～12月9日
会場: 東洋文庫ミュージアム1階オリエントホール

5. ガイドツアー

ミュージアム来館者へのサービスの一環として、館内ガイドツアーを実施し、好評を得た(開館期間は希望者がいる場合は15時に開催)。

6. ミュージアム諮問委員会

ミュージアムの運営について外部有識者の意見を取り入れるため、2019年7月17日に第5回委員会を開催した。

7. 成蹊大学図書館での展示

東洋文庫の蔵書を大学図書館入口にて常設展示した。

8. 文京区向けの普及活動

- a) 加盟している「文の京ミュージアムネットワーク(文京区主催)」による「文京ミュージアムフェスタ2019」(各施設による展示・体験コーナー、PRポスター、パネル等の掲示)にインターン生とともに参加した(12月19日、於文京区役所1階)。

9. 図書展示コンサルティング

ミュージアムにおける図書資料展示の経験を役立てるため、学芸員が下記の図書館・団体にて講演と実演を行った。

- a) 11月12日 図書館総合展ワークショップ
- b) 12月20日 神奈川県立図書館研修会

10. 入場者数

2019年4月1日～2020年3月31日における、ミュージアム総入場者数は以下のとおりである。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
入場者数	4,062	5,851	3,955	4,073	4,202	4,541	4,733	7,631	6,493

1月	2月	3月	計
5,496	3,251	182	54,470

E. 普及広報

東洋文庫所蔵の図書・史料の掲載・報道・放映等の依頼に適宜対応すると共に、ホームページを随時更新し、利便性を確保した。東洋学の若年層への普及を目指し、学校連携活動も行った。

1. 要人の訪問

アラン・ベロー (Alan Claudio BERAUD) 駐日アルゼンチン大使
マルタ・リディア・セラヤンディア・シスネロ (Martha Lidia Zelayandía Cisneros) 駐日エルサルバドル大使
サンジェイ・クマール・ヴァルマ (Sanjay Kumar VERMA) 駐日インド大使
ルー・フォスター (Lou Forster) Chairman, Johns Hopkins University
フランス政府査察団3名
ジョン・カーペンター (John Carpenter) メトロポリタン美術館キュレーター
エルミニオ・ブランコ (Herminio Blanco) 元メキシコ政府商工大臣
ソフィー・リー (Sophie Seungwha Lee) Assistant Director of International Alumni Relations at University of Washington
ジェイソン・スティーブンス (Jason Stevens) 米国三菱商事社長
グレッグ・メルリジャー (Greg Mellinger) CEO, HighQuest Partners
シビル・ジャグシュ (Sybille A. Jagusch) Chief, Children's Literature Center, Library of Congress
フレデリック・カタヤマ (Frederick Hiroshi Katayama) News Anchor for Reuters Television
IHRA (International High-speed Rail Association) 委員・海外ゲスト42名 一般社団法人国際高速鉄道協会

2. 報道実績

ミュージアムに関する報道実績の主なものを以下に挙げる(50音順)。
新聞: 『朝日新聞』、『東京新聞』、『東洋経済新聞』、『美術新聞』、『毎日新聞』など。
テレビ: NHK BS1『TOKYO EYE 2020』、テレビ朝日『じゅん散歩』、NikkeiCNBC Asia『Channel JAPAN』、日本テレビ『ヒルナンデス!』など。
インターネット動画配信: 『ニコニコ美術館』など。

3. 『東洋見聞録』

東洋文庫の活動をご支援頂いている「名誉文庫員」、「友の会会員」、職員OBほか関係者をつなぐニュースレターとして発行・頒布した。

4. メールニュース

東洋文庫ミュージアムのメールニュースをメール会員向けに毎月発信した。

5. 小学生・中学生・高校生・大学生向けの学習支援・普及活動

- a) スクールパートナーシップを結んでいる東京都小石川中等教育学校の中学 1 年生 160 名の見学会を実施した (4 月 26 日)。
- b) 千葉県富里市在住の小学 5, 6 年生を対象に見学会を行った (8 月 21 日)。
- c) キャンパスパートナーシップを結んでいる東洋大学文学部の学生 3 名を 8 月 1 日～3 日・7 日～10 日、12 月 3 日～6 日・10 日～12 日に、それぞれ学芸員が対応し博物館実習を行った。
- d) 文京区立駕籠町小学 5 年生の授業の一環として見学会を行った (10 月 16 日)。
- e) 東京藝術大学との協力協定により、11 月 5 日に同学学生による演奏会をミュージアム内にて開催した。また、同学彫刻科の卒業作品から一作品を選出して「東洋文庫賞」を授与し、2019 年 5 月から東洋文庫敷地内のオープンスペースにて作品を展示した。
- f) スクールパートナーシップを結んでいる東京都小石川中等教育学校の中学 2 年生 2 名の職場体験を 6 月 18 日～20 日の 3 日間に実施し、ミュージアム受付やガイド、学芸員他が対応してパネル作成等職場体験を行った。また、7 月 31 日～8 月 1 日に社会参加 (人間と社会) 体験活動として 4 年生男子 1 名、女子 1 名を図書部閲覧室で受け入れ、参考図書の整理を行った。
- g) 筑波大学附属視覚特別支援学校の中学部男子 1 名、女子 1 名に対して、東洋文庫ミュージアム運営に関する職場体験を実施した (11 月 15 日)。

6. 「斯波研究奨励金」の給付

2018 年度に斯波義信文庫長のご寄付によって設立した特定資産「斯波研究奨励基金」と「斯波研究奨励金制度」により、2019 年度、東洋文庫奨励研究員を対象に募集・選考を行い、関智英・多々良圭介・中塚亮の 3 名に対して研究奨励金年額各 50 万円を給付した。

7. 成蹊大学との連携授業

成蹊大学との連携講座として、2019 年度後期に文学部総合講義 A 「東洋文庫」で歴史資料入門―図書資料の収集、研究、公開」を担当した。ミュージアムやデータベース・出版物を通した研究成果の発信など東洋文庫の諸活動の意義について理解を深め、アジアの歴史・文化への関心を高める機会となった。2020 年度も引き続き東洋文庫の諸活動を紹介する講座を担当する予定。

8. 東洋文庫アカデミア

東洋文庫研究員をはじめとする各分野の専門家が講師となり、所蔵資料やこれまでの研究成果などの専門知識をわかりやすく教授する市民向け講座を下記のとおり実施した。

講座名	講師(所属)	期間	人数
イランの芸術 ペルシア書道に親しむ「ライラーとマジヌーン物語」	角田ひさ子(拓殖大学言語文化研究所講師)	2019 年 4 月 6 日～ 4 月 20 日	6
満洲の歴史Ⅱ	宮脇淳子(東洋文庫研究員)	2019 年 4 月 6 日～ 4 月 27 日	18
初歩の水墨画講座(『百花詩箋譜』を描く)Ⅰ	伊藤忠綱(二松学舎大学非常勤講師)	2019 年 4 月 13 日 ～4 月 27 日	13
イスラーム美術の細密画	青木節子(トルコ細密画と文化史の会)	2019 年 4 月 8 日～ 2019 年 4 月 22 日	9
ペルシア語の世界:入門編・土日集中	渡部良子(東京大学非常勤講師)	2019 年 4 月 13 日 ～4 月 14 日	5
満洲の歴史Ⅲ	宮脇淳子(東洋文庫研究員)	2019 年 6 月 1 日～ 9 月 7 日	20

講座名	講師(所属)	期間	人数
イランの芸術ペルシア書道に親しむ「ナスタアリク書体の基礎」	角田ひさ子(拓殖大学言語文化研究所講師)	2019年6月2日～9月8日	9
知の宝庫－西欧における古代の図書館から中世・近世・現代の図書館に至るまで	池田勇(元二松学舎大学非常勤講師)	2019年6月7日～7月12日	2
初歩の水墨画講座(『百花詩箋譜』を描く)Ⅱ	伊藤忠綱(二松学舎大学非常勤講師)	2019年6月8日～8月24日	15
イスラーム美術の細密画	青木節子(トルコ細密画と文化史の会)	2019年6月10日～9月30日	9
入門清朝満洲語講座:清代古典解釈の意外性を窺う①『論語』「八佾」篇	石橋崇雄(東洋文庫研究員)	2019年6月14日～8月23日	6
中国医学史散策:漢文帝(かんのぶんてい)と淳于意(じゅんうい)	角屋明彦(明治大学非常勤講師)	2019年6月23日～7月14日	21
漢字の歴史と最新の動向	笹原宏之(早稲田大学教授)、岩月純一(東京大学教授)、千葉謙悟(中央大学教授)、木村一(東洋大学教授)、吉川雅之(東京大学教授)、吉本一(東海大学教授)、阿辻哲次(漢検漢字文化研究所所長・京都大学名誉教授)	2019年6月29日～9月7日	79
出土資料からみた三国志と三国時代	関尾史郎(東洋文庫研究員)	2019年6月22日～7月13日	4
文字世界からみる文化と文明の歴史	鈴木董(東洋文庫研究員)	2019年10月7日～12月16日	18
イランの芸術 ペルシア書道に親しむ「ナスタアリク書体の基礎」	角田ひさ子(拓殖大学言語文化研究所講師)	2019年10月6日～12月15日	7
ユーラシアの石人－地中海から東アジアまで	林俊雄(東洋文庫研究員)	2019年10月8日～12月17日	5
初歩の水墨画講座(『百花詩箋譜』を描く)Ⅲ	伊藤忠綱(二松学舎大学非常勤講師)	2019年10月12日～2020年1月25日	11
東洋文庫の資料を読んでみる(英語編)	小澤一郎(東洋文庫研究員)	2019年10月12日～12月7日	8
イスラーム美術の細密画	青木節子(トルコ細密画と文化史の会)	2019年10月28日～12月23日	6
アイヌ語で読むカムイユカラ	吉川佳見(国立国語研究所非常勤研究員)	2019年12月21日～12月22日	5
イスラーム美術の細密画	青木節子(トルコ細密画と文化史の会)	2020年1月27日～2月10日	5
知の宝庫－日本及び中国古代の図書館から現代の図書館に至るまで	池田勇(元二松学舎大学非常勤講師)	2020年1月31日～2月28日	1
聖獣グリフィンの誕生と伝播	林俊雄(東洋文庫研究員)	2020年2月11日	6
イランの芸術 ペルシア書道に親しむ「ナスタアリク書体の基礎」	角田ひさ子(拓殖大学言語文化研究所講師)	2020年2月7日～2月14日	4
一味ちがう「大清帝国展」を愉しむために～政治から食物まで～	石橋崇雄(東洋文庫研究員)	2020年2月8日～2月22日	14
初歩の水墨画講座(『百花詩箋譜』を描く)Ⅳ	伊藤忠綱(二松学舎大学非常勤講師)	2020年2月8日～2月22日	12
漱石の漢詩と近代:初期(洋行以前)の作を中心に	黒田眞美子(元法政大学教授)	2020年2月13日～2月27日	4
モンゴル帝国から大清帝国へ	宮脇淳子(東洋文庫研究員)	2020年2月15日～2月29日	30

F. 国際交流

東洋文庫は、フランス国立極東学院および中央研究院の歴史言語研究所・近代史研究所(台湾)、ハーバード・エンチン研究所(アメリカ)、アレキサンドリア図書館(エジプト)、イラン議会図書館、SOAS(イギリス)、ベトナム社会科学院漢喃研究所、マックス・プランク研究所(ドイツ)、国際テュルク・アカデミー(カザフスタン)、吉林師範大学満学研究院(中国)院と協力協定を締結しており、これらを中心に国際交流を推進した。

G. 研究者の交流および便宜供与のサービス

1. 長期受入

(1) 外国人研究員の受入

フランソワ・ラショウ (フランス国立極東学院 東京支部長)

「近世日本の美術史・宗教史 (蒐集家と文人のネットワーク、黄檗文化等々)」

「近世期の東アジアの交流史 (日本・中国・ロシア・西欧)」

(2017年3月15日～2021年3月31日)

呉 真 (中国人民大學 中文系 副教授)

「日本祭祀芸能研究」

(2019年7月5日～9月6日)

[受入担当: 田仲 一成]

張 鵬飛 (広東省警察大学院 文学部 写作研究室主任)

「《水経注》金石文献整理、“六朝石刻匯校集注”東魏西魏北周北齊卷」

(2019年11月24日～2020年11月24日)

[受入担当: 窪添 慶文]

(2) 外来研究者の受入

水羽 信男 (広島大学大学院総合科学研究科教授)

「中国近代のリベラリズム思潮の展開」

(2019年4月1日～9月30日)

[受入担当: 久保 亨]

(3) 2019年度日本学術振興会特別研究員PDの受入

なし

(4) 2019年度嘱託研究員の採用

・相原 佳之[継続]

研究課題「中国明清時代環境史」に取り組みつつ、総合アジア圏域研究班に所属し、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究データベースの構築等に従事した。

・太田 啓子[継続]

研究課題「アラビア半島・紅海文化圏の歴史」に取り組みつつ、総合アジア圏域研究班に所属し、東洋文庫諸活動の継承・発展のため国際シンポジウム等を通じた国際交流事業に従事した。

・小澤 一郎[継続]

研究課題「近現代西アジア軍事社会史」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため欧文刊行物の編集・校閲に従事した。

・中村 威也[継続]

研究課題「中国古代地域社会、非漢族研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため和文刊行物の編集・校閲に従事し、かつその豊富な学術刊行物編集経験を東洋文庫の内外に対して普及させることに努めた。

(5)2019年度奨励研究員の任用

- ・関 智英 [継続]
科学研究費基盤研究(C)「近代日中関係の対外宣伝と相互理解をめぐる摩擦と模索—『順天時報』の分析を通して」(研究代表者:青山治世亜細亜大学准教授)の研究分担者として参画した。
- ・中塚 亮 [継続]
研究課題「明代小説『封神演義』の研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため図書事業に参画した。
- ・多々良圭介 [継続]
研究課題「清代文書資料を中心とした諸文献の紙質をめぐる研究」に取り組みつつ、東洋文庫諸活動の継承・発展のため研究事業、とくに紙質調査に参画した。

2. 外国人研究者への便宜供与

各国より東洋文庫を訪問する外国人研究者に対し、調査研究上必要とされる便宜供与を行った。

- China** 王玥 [北京大学医学人文学院哲学与社会科学系・教授](他 1名)
高京齋 [中国地方志指導小組弁公室・党組書記](他 5名)
董秀玉 [東アジア出版人会議・最高諮問委員、前生活・読書・新知三聯書店社長・編集長](他 7名)
高翔 [中国社会科学院中国歴史研究院・院長](他 6名)
呉元豊 [中国第一歴史档案馆満文部・元主任](他 1名)
李秉奎 [北京大学医学人文学院・副教授]
高飛 [中国蘇州科技大学歴史系・博士課程]
于薇 [中山大学歴史系・副教授]
王文隆 [南開大学・副教授]
- France** Cecile Sakai [日仏会館フランス事務所・所長]
Jacques Moret [フランス政府監査団・仏文部科学省職員](他 2名)
- Hong Kong** 郭鵬飛 [香港城市大学中文及歴史学系・教授]
李家駒 [聯合出版(集团)有限公司・副總裁](他 1名)
- Korea** 韓喆熙 [東アジア出版人会議・会長、トルペゲ(石枕)社代表](他 9名)
方炳善 [高麗大学校考古美術史学科・教授](他 23名)
- Mongol** S. Enkhbaatar [National Central Archives of Mongolia, Director, General](他 2名)
- Taiwan** 王俊昌 [国立台湾海洋大学・副教授]
林載爵 [聯經出版事業公司・発行人](他 2名)
陳耀煌 [中央研究院近代史研究所・研究員]
李仁淵 [中央研究院歴史語言研究所・助理研究員]
- Turkey** Fuat DÜNDAR [TOBB-ETU University, Associate professor]
Yakoob AHMED [Istanbul University, lecturer]
- USA** Ann BLAIR [Harvard University, Carl H. Pforzheimer University Professor]
HSIUNG Hansun [Durham University, Assistant Professor]
Devin FITZGERALD [UCLA Library Special Collections, Curator of Rare Books and History of Printing]
- Vietnam** NAM Nguyen [Fulbright University Vietnam, Professor]

以上

2019年度 公益財団法人東洋文庫特別事業報告書

公益財団法人 東洋文庫
理事長 榎原 稔

2019年4月1日から2020年3月31日までに行われた公益財団法人東洋文庫特別事業の概要は、下記の通りです。

事業内容

特別調査研究並びに研究成果の編集等

A. 日本学術振興会科学研究費補助金による事業

1. 研究成果公開促進費(データベース、学術図書)の対象事業

①学術図書

『明代江南戯曲研究』

[応募者:田仲 一成]

『対日協力者の政治構想—日中戦争とその前後—』

[応募者:関 智英]

2. 基盤研究(B)の対象事業

「戦前・戦中期における華中・華南調査と日本の中国認識」

[研究代表者:本庄比佐子]
(2015年度採用、5ヶ年・最終年度)

「寄進とワクフの国際共同比較研究:アジアから」

[研究代表者:三浦 徹]
(2017年度採用、4ヶ年・第3年度)

「公論と暴力—革命の比較研究」

[研究代表者:三谷 博]
(2019年度採用、5ヶ年・初年度)

3. 基盤研究(C)の対象事業

「12世紀アイユーブ朝における言論と伝達—書簡資料の利用による」

[研究代表者:柳谷あゆみ]
(2017年度採用、3ヶ年・最終年度)

「『大正新脩大蔵経』編纂の実態に関する書誌学的研究:増上寺報恩蔵本を通して」

[研究代表者:會谷 佳光]
(2018年度採用、3ヶ年・第2年度)

「三上次男考古・美術資料の研究とデータベースの作成」

[研究代表者:金沢 陽]

(2018年度採用、4ヶ年・第2年度)

「西洋における知識革命の物質的基盤の解明——16～18世紀の西洋古典籍の紙分析から」

[研究代表者:徐 小潔]

(2019年度採用、3ヶ年・初年度)

4. 若手研究の対象事業

「20世紀初頭の西・南アジア境界域におけるアフガン人武器交易ネットワークの研究」

[研究代表者:小澤 一郎]

(2019年度採用、3ヶ年・初年度)

「20世紀前半のインドネシアにおけるイスラーム運動とアラブ地域」

[研究代表者:山口 元樹]

(2019年度採用、4ヶ年・初年度)

B. 三菱財団研究助成による事業

1. 人文科学研究助成

「モリソン・コレクションの学際的・総合的研究：近代東アジア史と「アジア文庫」形成の資料的分析」

[申請者：斯波 義信]

(2019年10月採用、1ヶ年)

2. 人文科学研究助成「社会的課題解決のための大型連携研究助成」

「20世紀後半の東アジアにおける風土病の制圧過程の検証と疫学的資料の整理・保存・公開」

[申請者：飯島 渉]

(2019年10月採用、3ヶ年・1年目)

以上